悲しみのポーランド

2010. 04. 15. ～22.

中村哲之助議員の訪問記

私は 2010 年４月 15 日（木）～22 日（木）の８日間、ポーランド共和国（以下、POL 国）を訪問し、教育･福祉・都市計画・平和･人権などの視察調査を行った。この視察調査は会派（民主ネット議員団）の調査活動として行ったものであり、後日、公式の報告書を提出することになっているので､現地で体験したことを中心に旅日記風にまとめた｡ご一読いただき、感想をお寄せいただければ幸いである。

▼聖マリア教会の聖壇とステンドグラス（クラクフ）

＜はじめに＞

私達は去年の夏から会派の海外視察調査の検討を始めた。そのテーマとして、私達が取組んでいる福祉制度や危機管理、教育制度などを中心に、

①躍進著しいヴェトナムやブータン

②自然災害の多発するアイスランド

③ＥＵ加盟後も資本主義体制への移行で苦労の絶えない POL 国

④近隣国との関係や国際平和問題でのイスラエルなど、数カ国にしぼり、課題や受入れ先の状況などを検討し、９月に参加予定者全員の判断で POL 国に決定した。

POL 国はドイツ、フランス、イタリアなどのように日本の海外ツアーに馴染みのある国ではなく、あまり知られていない。それだけに海外調査で官庁や大手企業がよく利用しているエムオーツーリスト（以下、MO）に具体的な調査項目と日程を提示し、視察調査が可能かなどの打診を行い、昨年 12 月最終的な日程調査を依頼した。

MO からは新年早々、古都クラクフ（以下、KRK）における有名高校の「ヤンソビエツキIII世高校」の新しい教育プログラムや国際交流、KRK 郊外のアウシュビッツ（以下、AUS）強制収容所の視察、首都ワルシャワ（以下、WAW）での下院議会訪問や WAW 市での EU 加盟後の経済と福祉行政の調査など、大半が受入れ OK であると連絡があった。

これによって私達は調査日程を確定するとともに、視察補助員として前回の海外調査の際にも同行していただいた「国友美紀さん」の派遣を要請し、快諾いただいた。さらに、参加予定者は POL 国の概要などをあらかじめ関係者からお聞きするとともに、案内本などを購入し、海外調査の準備を整えた。

＜予期せぬ出来事＞

私達の POL 国への出発直前に、「大統領機墜落」の衝撃的なニュースが飛込んできた。レフ・カチンスキ大統領はじめ政府要人多数が乗り、首都 WAW からロシア西部のスモレンスクに向かっていた POL 国政府専用機が４月 10 日、墜落・炎上して 97 人全員が死亡したという事故はわが国でも大きく取上げられ、私達の訪問計画も一部を変更せざるを得なくなった。

（写真はポーランドの下院。正面に弔旗、飛行機事故で死去した議員らの席には遺影と花が置かれている）

第２次世界大戦中、ソ連(スターリン時代)の捕虜となった２万人以上の POL 国人が銃殺されて埋められた「カチンの森事件」は、今なお歴史に深い傷を残しているが、あれから 70 年、追悼式典に向かっていた大領領ら一行に再び悲劇が訪れた。憲法の規定によって大統領代行に就任したコモロフスキ下院議長は全国民が７日間の喪に服するよう宣言し、首都 WAW はじめ各地で追悼行事が行われることになった。そのため、すべての役所、博物館などは通常のオープンではなく、入場にも制限がかけられるとの連絡が入り、私達の訪問や意見交換の場所・時間の変更などが生じてきたため、現地の受入会社との間で協議を繰り返した。

また、これより先の３月下旬に、私達が利用予定のルフトハンザ航空がストライキに入るかも知れないとのニュースが外務省から伝えられた。旅行代理店からは「もし、ストライキが行われたとしても、国内線と近距離国際線だけで、アジア便などの長距離国際線はストライキがないと思うが・・・」とのことであったが、確実なものではなく、ストライキが実施された場合は取り止めざるを得ないと思っていた。これについては４月２日に「ストライキ

なし」の連絡をもらってホッとしたところだっただけに、驚きは強かった。

ポーランドへ出発（4月15日）

４月 15 日は午前８時に関空（以下、KIX）ターミナルビル４Ｆに集合となっているので、私は京阪守口駅 06:30 発のリムジンバスで行く予定としていた。一番近い枚方市駅前からのリムジンバスは KIX 08:15 着のため、どうしても遅刻してしまうからである。ところが同僚の山添議員は、枚方 06:31 発のバスは KIX 07:55 着と言われるので、京阪バスに問合せると確かに「そのとおりだ」との答え。第二京阪道路が全線開通となったことにより、経路が変わったこと、さらに守口発のバスは一挙に６本も減便になったことなどをこの時に知った。

４月 15 日は早朝、長男にバス停まで送ってもらうと、すでに山添議員は夫人の運転でバス停に着かれていた。バス乗車を終わると残席は 10 席程度しかなく寝屋川市駅で数人を乗せるとほぼ一杯になった。今後は予約しておかないと危ないと思う。

定刻の８時に KIX Ｂカウンター前に全員が集合すると国友さんの合図で大きなトランクを預ける手配。最近は搭乗者一人ひとりが自分の荷物をチックインカウンターで処理しなければならない。一昔前に比べると大変な違いである。荷物を預けた後、私達は POL 国の通貨に両替しようと外貨両替ショップ（北店）へ。１万円を出すと 260 ズロチと 42 円のおつりが出された。POL 国の１ズロチ　38 円である。そして、いつものように金属探知機を通り危険物の持ち込みがないか、「水」などの 100ml×10 本以内かなどのチェックが待っている。9.11 テロ以来、徐々にチェック度が強まり、最近は上着、ベルト、ネクタイピン、メガネなどを全て所定のトレイに入れてチェックを受けなくてはならない。これも安全対策のためで仕方ないと思うが、改めてテロや暴力のない平和な社会の到来を願う。

私達がこのチェックを受けるため何 10 メートルもの長い行列を作っていると、隣の半田議員が「アレ、あんなところに旭堂南陵さんがいる」と言う。私もそちらを見ると確かにそうである。声をかけると同氏は「いやー、えらいところで。お揃いで皆さんどちらへ？」、「POL 国です」、「あっ、大統領の国葬に行かれるのですか？」、「ええ、それだけじゃないんですがね、約１週間です」、「私らはシンガポールへ」などのやりとり。このチェックが過ぎると出国手続き。

ようやく構内に入り、私はカード会員用のラウンジでコーヒーを飲んで小休止。09:30 に 11 番ゲートへ集合となっているので約 30 分程度の時間がある。POL 国へは KIX からの直行便がないため、私達は KIX→フランクフルト（以下、FRA）→KRK と乗換えなければならない。10:00 発 LH741 便 FRA 行きの搭乗手続き開始のアナウンスが流れ、私達も機内へ。出発まで相当待たされたが、10:20 に離陸。機は一路北へ向い、ロシア→北欧→バルト海→南下し FRA へと向う。１週間ほど日本を留守にするだけであるが、大変な長期間を空ける気がする。

水平飛行になり 11:10 には飲み物サービスが始まった。ビジネスクラスだと着席したとたんに「ウエルカムドリンク」としてシャンパンやワインが出されるが、私達はエコノミークラスで贅沢を言えない。一通り飲物が行渡ると次は食事のサービス。この間約 10～15 分である。「チキン？or ビーフ？」と聞くので「チキン、プリーズ」と言うとにっこりとして温かいチキンの食事が出された。前席の背もたれのモニター画面には速度 968 ㎞/h 高度 10,668 m　外気温－48℃　目的地へ 8,648 ㎞　必要時間 7 時間　現地時刻 04:30 と出ている。この日は完全な移動日であり、ゆっくりと寛げるので食事とともに缶ビールを一本注文すると、ドイツビールが出てきた。前回（２年前）にヨーロッパへ行った時は日本人の客室乗務員（CA）が３人いると言いながら、日本語の分かる CA がほとんど対応してくれなかったが今回は名札を見ただけで日本人だなと分かる女性が数人いる。

食事を終えると多くの人達がテレビを見始めたが、私はマスクをして好きな小説を読み始める。途中でトイレへ行ったが３時間余りで一気に読み終えた。時計とカメラを現地との時差７時間（夏時間のため）の調整をし、暫く機内をウロウロ。エコノミー症候群といわれることのないよう、私と同じようにトイレの前で屈伸運動をする年配の女性がピーチクパーチクと井戸端会議。それぞれの胸や腰あたりに「△△ツアー」のバッチが付いている。

自席へ戻って週刊誌や機内誌などを読んでいると軽食として「サンドウィッチ」か「おにぎり」はどうかと案内がある。私はおにぎりと温かい日本茶を注文。ほとんど動かずにこんな食事をしていたら体調を害するのではないかと思う。

到着予定の約１時間 30 分前にまた食事。今度は「チキンのソテー」か「牛丼」のどちらかと聞く。初めにチキンを選んだので今度は牛丼にしたが、日頃食べている牛丼とは大違いである。私は食事でまったく好き嫌いはないので色々違ったものをと試してみるが、機内の人達は２回とも肉料理を選ぶ傾向がある。日本では誰もが夕食を済ませて寛いでいる時間帯であるが、POL 国ではまだ午後２時前。私は到着に備えてスリッパを脱いで靴を履こうとするが、足が浮腫んで少し窮屈になっている。何度か立ち上がって運動したつもりでも余り役立っていなかったようである。

ベルト着用のサインが示され機内放送が行われる。ドイツ語？で「寄付をしてほしい」という意味のことを言っている。日本語での説明で「*Help　Alliance*」のことだと分かる。背もたれに用意されている子どもの写真が印刷された袋に入れ、出口付近の CA に渡してもらえれば嬉しいと言っている。私は早速小額であったが 20＄入れて渡した。いま世界各地で多数の子ども達が命を落としている現実が痛ましい。毎年欠かさずユニセフや国境なき医師団などに寄付しているが、一人でも多く元気に成長してほしいと願っている。

また放送の終わりに、アイスランドの火山の噴火による火山灰の影響でロンドン、北欧便が一部欠航となっているので注意してほしいと言う。この時、私はまさか全面的に飛行禁止になるなどとは思ってもいなかった。

14:45 に FRA マイン空港に着陸し、入国手続きを済ませ KRK への乗換えのためＢエリアへ向う。KIX の何倍もの大きさを持つ空港であるため、様々な乗物で異動する人を見かける。

KRK へは適度の乗換時間であるので助かる。15:00 搭乗案内が流れ、順にゲートへ。そして１Ｆへ降りて専用のバスに乗り 16:20 搭乗する。そんなに大きな機体ではなく、２人（A・C)、２人（D・F）の座席配置であるため、すぐに席に着く。16:38 離陸し、暫くすると機内サービスでサンドウィッチを配り始めたが、KRK に到着後ホテルで夕食が用意されていると聞いているので余り食べないようにする。

Ｂ・08 ゲート前に着いて小休止。16:05

かつて私はウズベキスタンを訪問した時にも、座席のことでイヤな思いをしたことがあったが、今回も非常識な人がいた。私の席は 11Ａであるから当然、窓側。ところが窓側には既に 20 才前後の小柄な女性が腰掛けている。私が搭乗券を見せて「その席は私の席だ、間違ってないか？」と片言の英語で聞くが一言もしゃべらない。そして何を言っても窓の外を見たままで振り向きもしない。わずか 1 時間 30 分程度であるから腹を立てても仕方がない。私の英語が通じないのかもと考え、通路側の 11Ｃに座る。私達 10 人は席が比較的近いところにあるもののバラバラで、誰がどこに着席しているのかは分からない。窓の下 1/３ほどが雨粒で濡れている。後方で「このサンドウィッチはうまい。中のソーセージがいい」という声が聞こえるので、私もソーセージを食べてみた。確かにおいしい。赤ワインをグラス１杯飲んで、いつの間にか少しウトウト。目をあけて暫くすると 17:48 にドイツ語で「・・・」と何か放送が入るが何を言っているか分からない。多分、着陸するのでテーブルなどを元の位置に戻すようにというようなことだろうと思う。すると、私の横へ後方から男性がやって来て、11A に坐っている女性に何か言うと、その女性はバックからチケットを２枚出してその内の１枚を男性に渡した。どのような関係なのか分からないが、・・・不思議だ。窓から KAK の様子が見える。

17:57　KRK 着。静かな着陸に何と隣の女性が拍手している。ドアが開いて外へ出ると、日本の地方空港と少しも変わらない。RYANAIR と記された機体が多く駐機している。プロペラ機も結構多い。私達は国友さんの案内で出口へ向うと現地ガイドが迎えてくれていた。MALGORZATA（マウゴジャタ＝通称マルガレッタ、以下 MAL）さんである。私達は KIX で預けておいたトランクをそれぞれ確認し、バスへ向う。

18:30 バスに乗車した私達はホテルへ。わずか 10 人余りなのに、大きなバスである。このバスが POL 国でずっと貸切りになっている。「ドライバーは RAFAK(ラファウ)さんです」とガ

イドの MAL さんが紹介。一週間ガイドを務める MAL さんは早速、「この空港はヨハネ・パウロⅡ世空港とも呼ぶ。POL 国はローマカトリックの信者が 92%にも達する。中心を流れるヴィスワ川はバルト海まで約 1,000 kmにもなる。首都の WAW を日本でいう東京にすれば、KRK は京都・奈良に相当する。神聖ローマ帝国のプラハ・ウィーンなどと並ぶ中央ヨーロッパ屈指の文化の香り高い街だ。POL 国の首都が置かれていたのは 1038 年～1596 年だ。まもなく見えてくるヴァベル城は歴代ポーランド王の居城で、ここで先日の事故で亡くなった大統領の国葬を執り行うと言われている」などの説明をする。

このバスは本当に広い。乗降口は右側の前方と真中の２ヶ所あり、私は真中のドアの少し前に座っている。一つ斜め後方に松田議員、前に西脇、森、関議員が窓の外をそれぞれ見ている。日本時間では深夜の１時 30 分を過ぎているので、誰一人電話もしていない。今朝早くに日本を出てきたのに不思議と、この時間帯は眠気を催すことはない。

車が増え、路面電車の姿が見られるようになって、「街の中心部です」とガイドの MAL さん。19:12　私達が３日間滞在するホテル・ホリデーインに着く。ホテル前の道路はそんなに広くないため、バスは少し離れた場所でストップ。緯度が高いので、まだまだ外は明るい。国友さんがこのホテルのフロントで手続きをしている間、ロビーのイスに座って「静かなホテルだなあ」、「余り客がいてないなあ」などとおしゃべり。部屋割表などをもらって 19:30 私は 516 号室に入る。19:50 に地下１階のレストランで夕食ということなので、とりあえず貴重品

をセーフティボックスに入れておこうと思うが、なかなか上手く作動しない。４～８桁までの数字を自由に入力すればよいと書かれているのに、扉が閉まらない。仕方なく身に着けて地下１階へ降りる。

レストランには１人で食事の人と２人で談笑している人達の、２組の客しかいない。私達は旅の第１日目ということでもあり、みんなで乾杯と思うがなかなかビールが届かない。団長の冨田議員の発

声で 20:03 乾杯。日本では深夜の３時を回っているのでそんなに食べられないと思っていたが、生野菜が実に新鮮だし、メインの鱒料理も美味しく、それぞれを半分以上いただいた。誰もが疲れているので、この日は１時間余りで食事を終え、明朝 08:15 ロビー集合を確認してそれぞれの部屋へ。

私は３連泊ということになるので、トランクの中のスーツやカッターシャツなどを取出し、ハンガーに吊るしてクローゼットに入れた。セーフティボックスに再挑戦してみたがやっぱりムリ。こういう時は使わない方がよいと利用を断念。風呂もバスタブにすぐ湯が溜まるし、ポットも驚くほど早く沸騰する。

頭を洗ってサッパリした後、パジャマに着替え、持ってきた緑茶を飲むとすごく落着く。明日からの日程に備えて早く寝ようと 11:30 に就寝。長い一日だった。

教育と都市計画を学ぶ（4月16日）

この日は KRK 市の名門高校「ヤン・ソヴィエツキⅢ世」校と建築協会を訪問することになっている。06:45 モーニングコール、08:15 集合の予定になっているが、夜間に何度も目が覚めた。一度目は午前３時過ぎ、次いで５時過ぎ、３度目は６時 20 分だった。３度目はモーニングコールに近いので起上って着替え、洗面の後、ホテル周辺を散歩に出た。着替えの時、窓の外は少し雨が残っているようだったが 06:40 ホテルを出る時は傘が不要になっていた。

ホテルの２つ隣に中央郵便局があり、信号を渡ると広い公園に出る。この公園は昔、王宮を取巻く堀だったようで、府庁の横にある大阪城の堀が埋められて全て公園になっているという感じである。細長く、市街地に伸び、KRK 本駅横から左回りにチャルトリスキ美術館、聖アン教会、聖フランシスコ教会、ヴァヴェル城と取巻いている。私は、聖バルバラ教会の横から中央市場広場へと向ったが、国葬に合わせてマスコミ各社の中継用車両が数多く並び、それぞれが準備作業を開始していた。

かつての首都として何百年もの間栄えてきた面影はいたる所に見られ、歴史の重みを感じる。さらに全ての建物にといってもいいほどに揚げられた弔旗は深い悲しみを伝えてくる。これだけの歴史遺産をよく戦争で破壊されなかったものだ。広場の真中に立って大聖堂を見上げると、遠い歴史の中に吸い込まれそうである。

07:20 に散歩から帰って朝食。私の海外での朝食はアメリカンスタイルの時は決まって、「野菜・チーズ･玉子・コーンフレーク＋牛乳・ヨーグルト・フルーツ」である。「水道の水はダメ」という国では生野菜を絶対に口にしないが、ここでは十分過ぎるほどに食べられる。他の人は肉や魚料理を盛っているのが普通だが、私の場合は出来るだけ肉類は口にせず、乳製品とフルーツなどで水分補給することにしている。ただ、ここのコーヒーはあまりいただけない。家や事務所で毎日飲んでいるのと比べると、段違いである。30 分程で食事を終えて部屋へ。まだ 20 分余りあるなと思って雑誌を読んでいると、ルームサービスが府庁からの Fax を届けてくれた。私達が府庁でよく読んでいる新聞の切り抜きである。

08:10 にロビーに行くともう半分くらいの議員が集まっている。予定どおり 08:20 に出発し、ヤン・ソヴィエツキIII世高校へ向う。約 20 分で到着するが、とてもこれが学校とは思えない。ドアこそ重厚で風格はあるが、前頁写真のように正面はまるで「貸しビル」の入り口のような感じだ。私達は３階の教室へ案内され、08:50 から説明等が始まった。

・応接者　　マレク・ステンブスキー　　校長
　　レシェク・ルパ　　副校長
　　アンナ・ヴィエルビッカ　　教諭
　　カロリーナ　（生徒）
・テーマ　　ヤン・ソヴィエツキIII世高校の教育と POL 国の教育改革

説明に先立って、私達は大阪から持参した記念品を渡し、「今日は大変お世話になる。事前に調査項目をお知らせしているのでよろしく」と挨拶。マレク・ステンブスキー校長は「遠路よく来られた。心から歓迎する。しかし、我が国は今、深い悲しみの中にあり、皆さんに十分な対応ができないことを申し訳なく思う。国葬のために多くの方々が全国から来られるので、この学校もそのような方々に宿泊所として提供することになっている。私も多くの用件を処理しなければならないので、すぐに失礼する。後は副校長が説明する」と述べ、退席された。

この学校は、1680 年代にオスマントルコとの戦いに勝利した 200 周年を記念してヤン・ソヴィエツキIII世の名を冠して 1883 年に建てられ、1897 年に現在地へ移ったとのこと。中庭にトルコとの戦いを描いた大きな絵が掲げられている。POL 国では第１、第２、第５高校が特に有名で、この学校は第２学校だとのこと。そして戦勝記念日に合わせ、入学式は毎年９月 12 日とされ、ミサが行われヴァヴェル城まで全員が歩く。学生数の約 1,000 人に対して教員は 75 人で、案外と少ない。毎年卒業生は 300 人程度で卒業テストは５月に行われる。よほ

どのことがない限り卒業できるが、卒業テストが悪かった人は翌年もう一回受けることが可能だという。

これは大学入学に際してのテストはなく、高校卒業時のテスト結果によって希望する大学に入れるか否かが決まるので、悪い成績では希望大学を諦めなければならなくなる。そのため、一年間勉強したり、働いたりして、もう一回チャンスをもらう訳である。時には他の大学へ入った人が再挑戦することもあるらしい。

そのため、この学校も優秀な中学校から優秀な生徒がほしいと中学校に働きかけているようだ。これまでの小中８年、高４年→1999 年から小６年、中３年、高３年と６・３・３制に移行したが、これまでと同様に優れた生徒が集まってきているという。また、そのための様々な方策を講じている。少人数での授業や、やる気を起こさせるプログラム、表彰制度の導入などである。

生徒達の使用する教科書も見せてもらったが、まるで専門書かと思うほどで哲学の授業まである。そして何よりも、礼儀作法が素晴らしいことに驚く。副校長の案内で英語、生物、数学、哲学などの授業中のところを見せてもらったが、副校長がドアをノックし「日本の議員が来られた。少しお邪魔する」と言われると全員がサッと起立する。副校長が「・・・」と言うとサッと座る。多分「*Please sit down.*」なのだろう。そして部屋を出る時にもサッと立ち上がる。私達が今の日本でまずこんな風景を目にすることはできない。

副校長とヴィエルビッカ教諭のレクチャーの際、同席した生徒のカロリーナさんは一年余り前、日本に６週間短期留学（ホームステイ）したことを語った。彼女はその間、東京、横浜、大阪にも行き、京都のムラサキノ高校で学んだという。「日本は美しい素晴らしい都市だが、生徒が POL 国のように先生を尊敬しているとは思えない。ABC 先生と言わず、まるで友人のようにＡちゃんと言うのには驚いた」という。まさに日本の教育の問題の一つを指摘されたようだ。彼女のネックレスは何と日本の５円玉だった。

この日はあらかじめ調査テーマを示していたので、パワーポイントを使いながら説明を受けたが、議員側からは

１）　卒業試験と大学入学の関係
２）　学費と保護者負担
３）　生徒の進路
４）　文化・スポーツ活動
５）　留学制度
６）　日本文化の講座開設と生徒の反応

などについての質問も出され、自由な意見交換を行った。

校内の視察で気付いたことは暖房設備がエアコンではなくオイルヒーターであること、自販機の飲料水が割合に高額なこと（2.6 ズロチ、３ズロチなど、平均 100 円程度でスーパー

の２倍ぐらい)、卒業生全員の写真が廊下に掲示されていることなどである。

私達は副校長から記念のメダルとボールペンをいただき 10:30 に終了した。当初はお昼までということであったが、学校の置かれている状況からこれ以上長引かせることはできず、失礼せざるを得なかったのが残念であった。

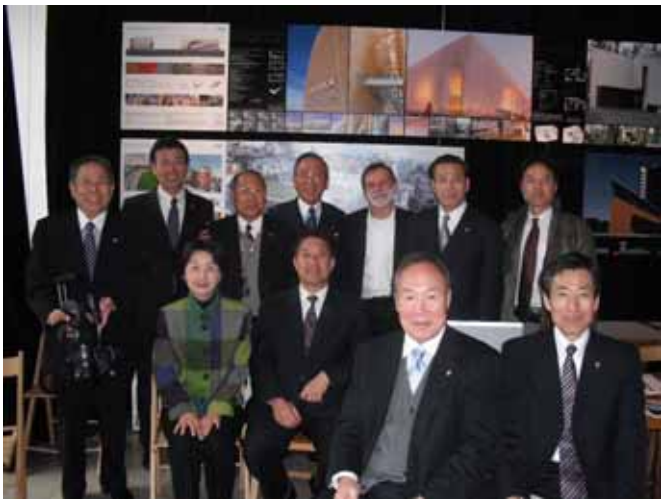
私達はすぐにバスに乗車し、５分程で次の視察先の建築協会へ向う。 10:43 建築協会に到着すると、すでに私達への説明のためプロジェクターなどが用意されていた。説明していただくスタンスラブ・デンコ氏に対して私達はここでも持参のお土産を渡す。

同氏は「*What is this？*」と言われるので、私は「*This is a cloth wrapper. Universal cloth bag！*」 と言うと、「*Oh, Oh*」と感心される。同氏は「建築系大学を卒業後、KRK 市の建築部に勤務し、その後アメリカ・テネシー州の大学で建築学を教えていた。POL 国へ帰ってからは KRK の建築家になり、この協会で 10 年になる。」と自己紹介をされた。

POL 国は 2003 年を境にして、建築行政が大転換した。特に空間計画の改革によってこれまで有効だった計画も全て無効になったこと。また何でも国営・公営であったが、私立の計画が認められるようになったこと。また手続きなども住民の意見が反映されるようになったため、行政計画に対する異議申し立てはもちろん、民間の計画したものに対しても NO が言えるようになったことなどを具体的に説明された。同氏はさらに、

１） 空間計画・経済的効率などの研究

２） 土地利用計画



が特にこの国にとって重要なテーマになっているが、これまでと異なって、コンセンサスを得るために相当な時間を必要とするので、建築家は大変な苦労をしていると語った。

現在、KRK 市では 70%が都市計画の対象から外れ、計画のあるのは市街地部分だけであるため、一定区域を開発しようとすると、開発者は「建築物条件の決定」という書類を作成し、KRK 市へ提出する。

それを受け、行政はその計画が KRK 市にとって好ましいものであると認めると、市長と契約し開発することができる。近隣に高層建築物がなければ、絶対と言っていいほど高層建築物は建てられないし、その逆もあり得るようである。

同氏は具体的な事例を示された。開発者(A)は KRK 郊外に住宅用地を建てようと計画 → その場所は珍しい蝶の生息地であったので、POL 国アカデミーと環境保護省が現地調査し検討 → 保存すべき特別の種であるが、さらに近隣の森林に同種の蝶が相当数見られるので、絶滅

の恐れはなく開発は OK とする → 建物は高さ・外観などに一定の規制、公園などの公共スペースの確保が必要 → 道路などを含め開発を 50ha、A が 30ha を提供し公園、街灯、劇場などを設けるなどで合意し、実現に向けて今、大きく動いているとのこと。約５年後には完成見込みとのこと。

私たちに示された計画概要では、果樹園や緑地が大きく残され、素晴らしい環境になると思われる。この開発には約 7,000 万ズロチ（24～25 億円）必要とのこと。

さらに同氏は「この協会に開発計画を立てている人達の約 1/3 が訪れる。行政側も専門的な人達の集まっている協会に相談するように指導している」と語った。日本でいう公益社団法人である。POL 国ではようやく民主的な考え方・行動とはどういうものであるのかを理解し始め、自然保護団体などの活動（デモなど）も活発になってきている。このような中、議員団からは

１）　空間発達、空間配置の考え方

２）　開発にかかる必要な財源と自治体の関与は？

３）　開発希望者と市長との契約のあり方

などの質問が出され、一つひとつ丁寧に答えていただいた。また同氏からは「KRK の今の姿をよく見ておいてほしい。旧市街地のヴァヴェル城をはじめ、なぜこれほど計画を慎重にチェックするのか、景観にマッチした建築を求めるのかが分かってもらえる」と説明。

ちょうど昼 12 時に終了した。外は割合雨が強く降り、傘がなければ歩けない。私達はバスが近くに来るまで５分余り待ち、乗車後 10 数分でレストラン・ミエスチャンスカへ着いた。昼食後は KRK 市の歴史遺産を視察することになっている。

簡単な食事を済ませた私達は徒歩でヴァヴェル城へ向かった。なだらかな坂を登って城へ入る（４日後に国葬が行われた際、棺を担いで多くの人達がこの坂道を静かに登る様子が TV でも伝えられた）。鐘楼や大聖堂の立姿は調和がとれて見事だ。宮殿の中はかつての王宮であったことを示す数々の装飾品や絵画が置かれ、部屋のつくりなども見事である。室内での撮影ができなかったので、これらを写真でお伝えすることはできないが、よく今日まで見事に保存できているものだと感心する。バベルの塔やノアの箱舟など旧約聖書の世界が次々と描かれ、ボッティ

チェリの絵などが壁面を飾っている。そしてベランダから見える多くの住宅などを案内者が説明し、「４つ目の建物にあの有名なシンドラーが住んでいた」と指を差して紹介。慌ててカメラを向けた。約１時間でここを出、大統領ら多数の首脳を追悼する場所へと移る。

ここには数日前から大統領夫妻らの死を悼む人達が次々と訪れ、花などを置いている。そして正面にはカチンの森惨劇 70 年の式典に向かう中での事故であったことを示す十字架が立てられ「KATYN」と記されている。その両脇に直立不動の国軍兵士が２人いる。私達はここで死去された方々のご冥福をお祈りした。私達が祈りを終えて立ち上がると国軍兵士の２人が交代にやってきた。それを見た後、私達は聖マリア教会の大聖堂に入場した。本当にすごい大聖堂である。美しいステンドグラスは大きさも世界最大級(１面写真)という。この大聖堂はフラッシュさえ使わなければ写真撮影 OK とのことで早速５ズロチを出すと、係員が左胸の上に「VIDEO・FOTO」というオレンジ色のワッペンを張付けてくれた。この時が 15:50 過ぎであまり人影はなかった。祭壇には生前の大統領夫妻の笑顔の写真が静かに置かれている。この聖マリア教会の設立からの歴史などをガイドの MAL さんが内緒話のように小さな声で説明してくれる。

外へ出て塔を見上げていると「間もなくラッパの音がしますよ。これは昔、POL 国を攻めてきたモンゴル軍の姿を見つけた衛兵が非常事態を知らせるためにラッパを吹いたものの、敵兵の矢が喉を貫き絶命してしまった。その衛兵の勇気を今に伝えているもので、１時間置きにラッパが吹かれ、当時と同じようにその曲も途中で終わる。東西南北４ヶ所の窓を開けてラッパを吹くのが下から見えるので、どうぞ」と言う。確かに写真のように短い時間であったが、ラッパが見えた。この奏者は地元の消防署の７人の人達が交代で塔の上まで上って吹くという。エレベーターもない塔に登っていくのは大変だと思うが、このような歴史をいつまでも引き継いでほしいものである。日本であればきっと「事業仕分け」で真先に×となってしまう気がする。

建築

協会のスタンスラブ・デンコ氏が「ヴァヴェル城と広場、そしてこれを取り巻く数々の歴史的建築物を見ていただければ、POL 国の現状と国民の歴史的遺産への思いを理解してもらえるだろう」という説明がよく理解できた。一般的な観光ツアーであれば、建並ぶ店に入ったり、周辺をもっと観光したりするのだが、そうもいかず、私達は徒歩でホテルへ向かった。17:50 にホテルに着き、18:45 にロビー集合を確認して全員が解散。私は部屋へ戻るとポットで湯を沸かしバスタブに湯を張った。しかし、この時間帯に風呂に入ると湯冷めするのではないかと思い、足を洗っただけで、靴下を履き替えて洗面の後、今日の出来事を少しメモ。その日の出来事はできるだけその日の内にメモをしておかないと記憶が曖昧になってしまうからである。温かい濃い目の緑茶を飲んで少し休憩し、ロビーへ。半分くらいの議員が集まっている。18:45 全員でレストランへ向かう。

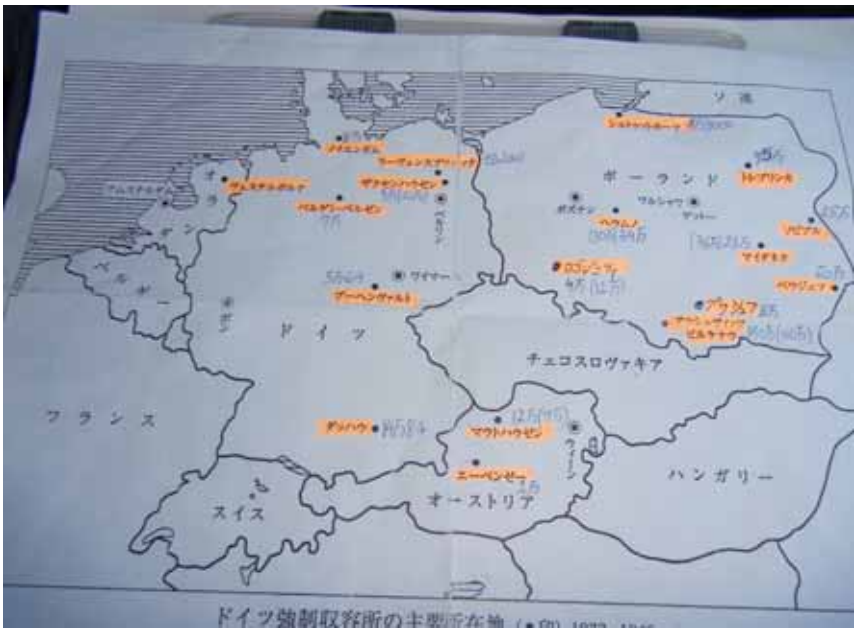
20:15 に食事を終えた私達は思い思いに中央市場広場へ向かった。ここではまだ昼間からの突貫工事が続いているが、まるで何かの前夜祭のような感じの歌声が流れている。もちろん、国葬に合わせて行われている追悼行事の一つであるが、暗くて何人いるのか分からない。昼に祈りを捧げた場所には今も多くの人達が、日本でいう灯明を置いている。ここでもう一度お参りをし、周辺を散歩しながらホテルに戻ると 21:10 だった。

部屋へ入って風呂に浸かりながら「今日はすごく疲れたな」と感じる。昨夜十分に眠れなかったのと、まだ体が日本時間のままで POL 国時間になっていないこと、この時刻自体が日本では朝方の４時過ぎであることなどが原因だろう。午後に行ったヴァヴェル城をナチスドイツ軍幹部がずっと「本部」として使用していたことや、中世の国王がここで各地の有力者達を集めて参議を開いたこと、歴史に深い傷跡を残した AUS が近くにあることなどを考えると、POL 国の波乱万丈の歴史を教えられる。11:30 就寝。

戦慄のアウシュビッツ（4月17日　午前）

昨夜は 12 時前に寝たのに、今朝は４時過ぎに目が覚めた。06:30 のモーニングコールまでは相当時間があると思ってもう一度休むが、１時間余りでまた目が覚めた。もう寝ているわけにもいかず起き上がって、トランクから小説を出して読む。先日発表された直木賞作品である。一時間余り緑茶を飲みながら小説を読んでいると、06:35 にモーニングコールがあった。「*Good morning,…*」と言うので「*Thank you, …*」と言うと電話が切れた。最近のホテルは宿泊者が電話機や時計などをセットするか、フロントへ頼んでおいても大抵はコンピューター音で知らせてくるだけなのに、このホテルは一人ひとりの客に担当者が電話しているようである。

07:00 着替えて地下１階のレストランへ行くが、入口の正面に置いてある椅子に関、山添両議員が座っている。レストランは明かりも点いていない。そこへ国友さんがやってきて、「エッ、閉まってるんですか？」と聞く。「そうだ」と言うと、早速ドアをノックし「早く用意を！昨夜、7 時にはオープンすると聞いている」と苦情。従業員は 07:30 からだと言うが、何度かのやり取りで 07:10 にオー



プンするから少し待ってほしいと返事。すぐにライトが点いて中の用意が始まる。程なくしてドアが開けられたが、日本のような訳にはいかない。私はいつものとおり、野菜・チーズ・玉子・コーンフレーク＋牛乳・ヨーグルト・フルーツで食事を終えて部屋へ。07:45 にロビーへ降りて、コーヒーサービスを受ける。

08:00 出発で今日は AUS(POL 国では、オシフィエンチム）を訪ねることになっている。予定どおり出発すると 10 分足らずで車窓はもうすっかり田舎の景色になっている。約１時間のところにあるため、今日の視察のための予備知識として MAL さんから資料をいただき説明を受ける。ドイツが建設した強制収容所は写真のように、何とヨーロッパに 19 ヶ所もあり、その内の９ヶ所が POL 国内にある。その最大のものがビルケナウ(以下、BIR)で、次いで AUS だということである。

そして驚くべきことは第二次世界大戦前の POL 国の人口は 3,500 万人余りであったのが、終戦後の人口は 2,300 万人になったとのこと。移住した人もいるようだが、1,000 万人以上もの人々が殺害された訳である。戦慄するとはまさにこんな時のことを言うのであろうか…。そんな説明を聞きながら 09:08 に AUS に到着。すでに大型バスが１台と自家用車が数台止まっている。トイレなどそれぞれが入場の準備中、MAL さんらが依頼していた花束を購入して持ってきてくれた。これを私達は「死の壁」にお供えし、多くの方々の冥福を祈る予定である。

入場した私達は、入口付近でガイド用イヤホンをお借りして着用する。09:20 過ぎから中谷剛(なかたに たけし)氏の説明が始まった。同氏は学生時代に訪問した AUS のことが忘れられず、このようなことを後世に語り伝えていかなければならないと、苦学して POL 語での AUS のガイドテストに合格された、ただ一人の日本人ガイドである。日本では同氏の AUS を伝える書籍も出版されている。

同氏の案内はまず、私達がよく知っている有名な入口から始まった。有刺鉄線で囲まれた収容棟の入口で、ここには「働け、そうすれば自由を得られる」とある。写真の右端の私の後方に建っているのが看視塔でこれが数え切れない程に設置され、有刺鉄線に触れた者には容赦なく銃弾を浴びせた。

収容棟のある構内へ入った私達は、数多く建てられた煉瓦造りの建物の一角で、「この建物１棟に平均 700～1,000 人が収容されていた。そして囚人

を働かせるため、１日２回の薄いスープと黒パン一個を与えた。囚人は差別され、国籍や反社会的分子、教育囚人、エホバの証人、ホモなどを色で区別した。囚人は当然、機械の部品のように扱われ、この監督として命と引換えに囚人を充てた。囚人によって囚人を看視し、看視役の囚人には個室を与えた。収容された囚人は重労働と飢餓のため２～３ヶ月で次々と死んでいったが、その死者数を遥かに超える新たな囚人をドイツ軍は送り続けた。収容所に入りきれなくなってくると第２、第３の収容所を建設していった。AUS の第二番目の収容所が BIR で、規模も殺害した人数も AUS よりはるかに多大だった‥」と同氏から聞く。

中谷　氏はまた、「ナチスドイツは一方で非常に諸外国の動向を気にしていた。とりわけ、ソ連によるカチンの森事件が明るみに出た直後から、これまで大量殺戮し、埋めていた遺体を掘り起し、すべて証拠が残らないよう焼却した。ヨーロッパでは通常、遺体は土葬するのが常識であったから、ここでの焼却は文字どおり想像を絶する行為だったようである。

24 時間休みなく、一つの炉に２～３体を入れて 30～40 分で次々と焼却し、骨は灰のように細かく砕き、近くの畑や川に捨てたようである。ここでの毎日の焼却は 350 体ほどだったという。AUS では殺害した人達の数が 110 万人とも 150 万人とも言われ、この差は今なお埋まらないとのことである。時には収容者が 10 万人にもなる時があったようであるが、高齢者、乳幼児、妊婦、病人、障害者らは労働力になり得ないとし、収容所に連れてきた途端にガス室へ送り、チクロンＢで毒殺(処刑)した。まさにこれは戦争などではなく、絶滅センターでしかない。この人達は囚人として登録されることもなく焼却されたため、一体何人が収容所送り→ ガス室 → 焼却となったのか、正確には分からないという。

このような説明を聞きながら建物に入る。ここは今、国立博物館とされている。展示品は撮影禁止となっているため、これをお見せすることはできない。しかし、これをお見せできても、残された遺品を見て、その凄まじい状況への感想を正しく伝えることは、私には到底出来ないだろう。逮捕された者や移住するのだと騙されてここへ来た人‥‥など様々であるが、その人達の残した物は余りにも痛ましい。

（▲ AUS 博物館発行の「その歴史と今」から）

・８万足を超える靴（大人だけでなく幼児の小さな靴などもある）
・4,000 個にもなるトランク（住所や名前まで書かれたものもある）
・１万個を超える鍋
・数え切れないメガネ
・何百組とある義足や義手

・女性から切取った髪の毛　1,900kg（切取った総量は何と 8,900kg に達する）
・金歯などを熔かして作った金属類が 40 ﾄﾝ

など、見る者を息苦しくさせてしまう。女性の髪の毛の展示を見ていると本当にゾッとする。ナチスドイツは死体から回収（これは奪ったのではなく取戻したのであって、悪いことではないのでこう呼んでいた）したこれらの物をすぐに社会の中に吸収させていった。金だけで 1,638.7kg あったようで、これはドイツの中央銀行へ、そして髪の毛は他の繊維とともにカーペットや布地として使用された。

ナチスドイツはこの強制収容所の存在を世界に隠さなかった。世界には「社会を不安にする者を収容しているのだ。そしてこの者達を労働させるのであって、虐待しているのではない」と主張した。建物の中に当時の法務大臣の言葉が残されている。それは「ドイツの国民を守るため、我々は彼らを排除するのだ」ということである。「虐待するのではない。第一次世界大戦後の不安定な社会はユダヤ人らによってもたらされた。そのため、彼らに奪われたものを彼らから取り返すのだ」というのが理由である。従って、終戦後、虐殺してきた者達を問詰めても彼らは謝らなかった。「私達は何一つ悪いことはしていない。国の命に従ったのだ。もし、それが間違いなら、私達も被害者だ」と語ったようである。中谷氏は今のパレスチナを取巻く状況とどこか似ているのではないかと語った。

当時、ヨーロッパには 800～1,000 万人のユダヤ人がいたが、戦争中にその内の 600 万人を超える人達が殺害された。そして、そのような状況を打開できず、じっと見ているだけの人々もまた数多くいた。「特定の者の暴走に歯止めをかけることができないという問題こそ、歴史は問うているのではないか」と同氏は言う。

囚人の中には外部と連絡を取ろうとする者もいたし、やり方に反対する人達もいたが、その人達はすべて「死の壁」と言われる所で銃殺刑に処せられた。壁に向かわせ、つまり後方から首に直接銃を着け、一発の弾丸で処刑したとのこと。私達が映画などでこのような場面を何回か見たことはあるが、10m以上も離れ数人で一斉に引き金を引くということではなかったようである。また、公開の一斉絞首刑もたびたび行われ、その大型処刑台は今もなお残されている。

私達は死の壁と言われる場所へ行き、用意してきた花束を供え、全員で犠牲者の冥福を祈った。AUS を後にする時、同氏が語った「ここから出る方法はただ一つ。焼却炉の煙突から煙になって出ていくのだ」という言葉はズッシリとこたえた。

さらに、「韓国人は日本人の５倍以上がここを訪れている。日本の旅行会社は、海外旅行、とりわけヨーロッパ旅行の一こまに AUS を中々入れてくれない。テーマが重過ぎるからだろうか。非常に残念だ」という言葉は、今日の日本社会の風潮と国民性を考えさせられる。そ

して中谷は、「私は学者でも研究者でもない。平和に貢献したいのだ。政治家である皆さんに託したい」と語った。

AUS に次いで私達は３ｋｍ離れたところにある BIR 収容所を訪れた。ここは AUS ２号とも呼ばれる。収容者は時に 10 万人近くにもなり、粗末な木造のバラックが次々と建てられ、300 棟以上もあった。そして牛馬の小屋と間違うほどの劣悪な施設(写真＝蚕棚にそっくり)で生活を余儀なくされ、時には－20℃くらいにもなる POL 国では数多くの囚人が凍死していった。現在ここに残っている施設はわずかであるが後世へ伝えていくため、入場料、物品、書籍販売などによる収入に加え、EU からの助成金も受けて保存・修復作業を続けている。これは一国の歴史ではなく世界の歴史だと認めている訳である。暖炉の煙突が数多く残っているが、残された収容棟の解体・再建などには１億 2,000 万ユーロ(以下、€)が必要だという。

この BIR も有刺鉄線で囲まれ、看視所の数の多さに驚くとともに、SS 隊員らが空爆の際に身を隠す防空壕がいたるところにあるのが目に入る。しかし、彼らが空爆で防空壕に逃げ込むことは一度もなかったようである。連合国軍はここが強制収容所であることは当然知っていたし、何万人もの人達が収容されていることも把握していた。しかし誰一人としてここで無差別に毎日大量殺戮が行われ、焼却していたとは思わなかったとのこと。当時、通常の人達は一人として１年で 50 万人も殺害し、焼却していることを想像できなかったようだ。従って、ユダヤ人達はなぜ連合軍は空爆などによって私達を助けてくれなかったのかと大変な不信感を持ったようだ。

ガイドの MAL さんは「今日は各地で正午から追悼行事が行われるため、一定時間、バスなどがストップされるかもしれないので早めに移動したい」と言う。私達は「死の門」から伸びている線路で記念撮影(上の写真)し、バスに乗った。かつて多くの人々がここへ運ばれ、虐殺さ

れたのである。私達の立っている所が正にその場所である(下はAUS博物館発行の「その歴史と今」から)。もう11:35になっている。ここから私達はPOL国の歴史で大きな役割を果たしてきた、ヴィエリチカ(以下、WIE)の地下岩塩坑を訪れることになっている。

すごい地下岩塩坑（4月17日 午後）

AUS・BIRからバスで約１時間の所だと聞いていたが、到着したのは12:43。近くのレストランで簡単な食事を取った私達は少し休憩した後、13:50 WIE 岩塩坑へ。ここは全体が世界遺産として登録されている。入口を見ているとこんな所に岩塩坑があるのか？と思う。ここでも写真を撮りたい人はお金を支払う。同じようにワッペンを胸の上に貼り付けた私達は14:00 に入場。私達はまずエレベーターに乗って地下１階（－60m）へ。日本ではこんなエレベーターは安全上ダメということになると思う。何とエレベーターは４層構造で一層のボックスに７人乗れる。私達の上にも下にも誰かがいるわけである。エレベーターが外から閉められると一気に下降し地下１階の採掘場所跡に。ここで専属のガイド（スジスワク氏）が説明し、MAL さんが通訳するが、暫くすると MAL さんだけの説明になり、ガイドは道案内だけになっている。

ここの岩塩の純度は99%だという。鉄分が入っているとピンク色に見える。坑道はこれまで順に掘り続けてきた結果出来た穴であり通路であるが、天井の高さは４～５mある。この地に岩塩ができたのは1,800万年前で発見は4,500年前のようだ。カリフラワーのようになった塩の花、塩辛い壁面、大理石かと思うほどの床（通路）、天井からの塩の氷柱（つらら）‥‥等、感心するものばかりである。私はこれまでいろいろな鉱山を見てきたが、それらとは全く別の物である。ほとんどの場所に安全対策の支柱などが無く、壁そのものがコンクリートの擁壁の様になっている。運搬のためにトロッコを通したレールが残っているところもある。この中では、採掘した岩塩を運び出すための様々な工夫が見られるが所々に馬が置かれていたようである。この坑道内に一度入れられた馬は二度と地上には出られなかったという（外の明るさに目が耐えられなくなってしまう）。700年もの間、POL国の財政を支えてきたここWIEであるが、一方で、ここで働く坑夫達にとっては他で働くよりも多くの給料を獲得できるため、全国から多くの労働者が集まってきた。最近まではほとんどが人力であったが、時にはダイナマイトを使用することもあったらしい。

現在の見学ルートは約3.5kmであるが、700年以上もの採掘によって、坑道は300km以上

になり、採掘によって空洞となった部屋は 2,000 を超える。坑夫達が祈りを捧げた聖ギンガ礼拝堂はまさに地下宮殿とでも言うほど立派な造りになっている。岩塩で出来たシャンデリアが輝き、床はまるで大理石を敷きつめたようだ。柱や壁にも彫刻が施され、これが文化・芸術とは無縁と思われるような人達が造り上げたものだと説明され、ただ驚くばかりだ。またこの地下では現在、会議、宴会、結婚式などが行われるとともに、アレルギー疾患などを治療するためのサナトリウムまでがある。岩塩から放出される成分が人体にとりわけ呼吸器などには効果的で喘息の発作などもここでは起こらないという。さらに地下 100mもの場所に地底湖がある。濃度は 35%だから、何と 1㍑中の塩は 350ｇにも。20～30 分もこの中に入ると死亡してしまうようだ。そして、岩塩で作った様々な彫像や壁画がある。

私達は地下 135mの場所からエレベーターで地上へ戻るが、階段を登れば 750 段あるようだ（一段は平均 18㎝）。15:40 外へ出た私達はバスでホテルへ向かう。

16:20 ホテル到着。今日で KRK 滞在は終わり、明日の日曜日はザモシチ(以下、ZAM)へ移動するため、部屋へ帰って荷物を整理する。クローゼットに吊るしていたスーツなどをトランクに入れ、雑誌類を捨て、下着類は洗濯することに。私は海外へ出る時は下着など古くなった物を用意し、（家では廃棄処分しないで）現地で捨てていくことにしている。こうすると、トランクの中にゆとりが生まれる。ところが今回ばかりは火山の噴火によって航空機が飛ばないため、本当に予定どおり帰国できるかどうかが分からず、もし POL 国やドイツに長く滞在ということになると困るので、今日からは下着類を捨てないで洗うことにした。

私は 40 分程度でこれらを終えて、これまで何度も見てきたヴァヴェル城や聖マリア教会などのある地域の反対側の東地域を一度散歩してこようとホテルを出た。城や教会などのように目を引く建築物はないが、路面電車やバス、乗用車、歩行者など、眼に入る風景は、普通のどの街でも見られる「普通の景色」だ。ただ、旧市街のような広大な緑地は見られない。40 分余り散歩して戻ると、ホテルのロビーには何人かの議員が集まっていた。それぞれの議員が、「TV を見ていても言葉は分からないが、アイスランドの火山噴火は凄い。その影響を伝えているが、どの空港も閉鎖している。我々はどうなるのだろうか」と、この話題になってしまう。

18:05 私達は徒歩で歴史地区の中にあるレストラン「マルモラダ」へ向かう。スモレンスクでの悲劇に遭遇した POL 国首脳の写真が大きく掲示され、多くの人達が織物会館のある中央市場広場へ集まり始めている。私達は約 10 分で到着。食事の中の話題はやはり「AUS と BIR」に。本当に重いテーマであった。またこれとともに、本当に飛行機が運航されるのか、運航され

なければどうするのか？などいろいろと話し合い。現在も空港は全て閉鎖され、多くの人達が足止めを食っているようである。また英・仏、独・POL、露・独などの近距離国際線も全て欠航となり、どの旅行者も弱り果てているようだ。私達は明朝から外務省や大使館とも連絡を取りながら帰国の方策を決めることにして、20:30 に食事終了。国友さんから「明朝は KRK から ZAM へ長距離移動する。くれぐれもパスポート私達は明朝から外務省や大使館とも連絡を取りながら帰国の方策を決めることにして、20:30 に食事終了。国友さんから「明朝は KRK から ZAM へ長距離移動する。くれぐれもパスポートや貴重品を忘れないように」と言われる。私は何人かの議員と一緒に身動きできないほどになっている広場へ向かう。特設ステージでは何という曲かは分からないが演奏が続き、歌声も響いてくる。ステージの横に設けられたスクリーンにそれが大きく写され、何万人という人達がじっと舞台に向かっている。追悼音楽祭が遅くまで続くそうである。私達は 15 分程でここを後にし、散歩しながら 21:10 ホテルへ戻った。

バスタブに浸かりながら、家や事務所には一度も電話していないし、飛行機のこともあるので明朝は早くに電話で連絡しておこうと思う。22:30 を過ぎているが府庁から昨日届いた切抜きを少し読み就寝。

☆クラクフで感じたこと

１ 公園の配置がすごい

旧市街地に広く整備されている堀を埋めた公園は早朝の散歩で、わが国ではあまり見られないいい公園だと思った。日本では「公園内に立ち入り禁止」という看板が大抵見られるのに、ここでは見つけられなかった。写真のように、誰でもまたげるような高さでパイプが目立たないで、囲いの役割を果たし、さらに 15～20 メートル間隔でベンチが置かれている。そして同色のゴミ箱が 30 メートルおきくらいに用意されている。早朝のことだから昼間にどんな利用がされているのかは分からないが、昼休みの勤労者がベンチで談笑しているのではないだろうか。また、旧市街地をグルリと取り巻いていることから、災害時などの避難場所として素晴らしい

スペースだといえる。

2 路面電車は高齢者につらい?

広島市などで、今でも多くの人達が利用する「路面電車＝市電」がここ KRK でも活躍している。しかし、ほとんどが写真のような形態で、ステップが３段ある。私は駅でこの様子をしばらく見ていたが、高齢者は苦労してステップを下りていた。さらに小さなプラットホームの横を車が通過しており、よく事故が起こらないなと心配。また、この電車の車体は横幅が非常に狭い。極端な言い方をすると、レールの幅がほぼ車体の大きさという感じである。日本ではレールの幅よりも車体はかなり広いが、車内は相当窮屈感があるのではないだろうか。

3 郵便事情

ここでは至る所で郵便ポストを見かけた。かつて中央アジアでは、一体何処へ行けば郵便ポストがあるのだろうかと思い、やっと４日目に見つけたということがあった。POL では探さなくてもどこにでもあるような感じである。BIR の建物にまで設置されていたくらいである。それと驚いたのは、各家庭への郵便物の配達は写真のように、女性がキャスター付の旅行用バッグのような物で、徒歩で配達しているのである。都心部だけがこのような方式なのかも知れないが、これでは能率が悪すぎるような気がしてならない。

4 道路が駐車場に

ヨーロッパの国ではよく見られるが、この国でも道路が完全に駐車場になっている。左の

写真のように１斜線近くを乗用車が占拠している。おまけに、右の写真ではこの車の所有者がこのアパートの住人で、駐車が認められているというステッカーまでが貼られている。元々

車を購入するのに駐車場が義務付けられていなかった時代から、今は大きく事情が変わってしまったのに、これを改正しようという動きはないようである。

ザモシチの建築美　（4月18日）

5:30 に目が覚めた。今朝もポットでお湯を沸かし緑茶を飲む。パジャマやスリッパ、靴などを整理してトランクに入れる。資料などをいただいたのと WIE で購入した岩塩が入って大分重くなった。07:00 に昨日と同じようにモーニングコールがあった。

07:15 家へ久しぶりに電話する。日本では午後 2 時 15 分だ。このホテルは外線へは⑨をプッシュと書かれているので 9・0081・72・831・3131 を押すと日本と全く変わることのない妻の声が聞こえる。雑音も一切ない。「21 日に乗る予定の FRA 発の飛行機が飛ばないかもしれない。その前に POL 国から FRA への飛行機もダメかも知れないので帰国がずれるかも知れない」と言うと「日本でもテレビでヨーロッパの空港を映しているが凄い状況だ。仕方ない、運を天に任せるしかないネ」と答える。今日は日曜日で事務所は閉めているので家への Tel だけで終わり、トランクをドアの外へ出し、07:35 に朝食へ。

私の朝食のパターンはほとんど変わらないが、今日はソーセージ、じゃがいもを加えた。このホテルのチーズは種類が少ないが味はよい。カマンベールは日本より少し塩分が多いが、プロセスチーズはその逆で食べやすい。ヨーグルトは客が自分でカップに入れるのではなく、紙コップのような中に入っている。ブルーベリー、ストロベリーなどの写真が印刷されたもので容量は 180ml もある。そして少し甘い。オレンジジュースをコップに一杯と、コーヒー一杯、フルーツをしっかりと食べて食事を終わる。08:10 になっている。もう一度部屋へ戻り、忘れ物はないかをチェックし、ロビーへ向かいチェックアウト。

08:45 全員が揃ったので出発。沿道にはテープが張られ、物々しい警備体制がとられている。警察官が 10m 間隔位で立っている。早く出ないと交通規制も行われるようである。大統領の国葬は 20 日の予定であるが、今 POL 国では、スモレンスクでの事故で死去した人達の身元が判明すると、それぞれの葬儀がその人の故郷などで行われているという。車窓からバルバカン、フロリアンスカ門などを見ながら進むと、私達が出発して 10 分足らずの 08:54、「連帯」の旗を持って会場へ向かう多数の人達が見える。レフ・カチンスキー氏はワレサ元大統領とともに連帯で活動していたことから同氏の死を悼んで参加するようである。また、その一方で大統領をヴァヴェル

城に埋葬することは問題だとデモも展開されているらしい。歴代の国王が埋葬されている場所に民間人の大統領を埋葬するのはおかしいということのようだ。

これから長いバスの旅が続くので、MAL さんが「POL 国の歴史などについてお話する」と説明が始まった。POL 国はスラブ人が定住することによってできた国で「ポレ」とは「畑」の意味で畑の民ということだ。966 年に有力な代表（王）が 10 人、ローマカトリックに改宗して洗礼を受け POL 国はローマカトリックを深く信仰するようになった。

13 世紀にはドイツの騎士団が来たこと、14 世紀には WIE の岩塩を発掘して国を潤した国王が木造の家屋を煉瓦造りにと奨めたこと、KRK に世界で２番目に古い大学を創ったこと、1700 年代に国が分割されたこと、1791 年に世界で２番目と言われる憲法が出来たこと、1918 年に POL 国が正式に独立したこと、1939 年５月に第二次世界大戦がポーランドの北部、グダンスク（連帯の発祥地）で始まったこと、1947 年からソ連の影響で社会主義体制になったこと……などが次々と話された。

これらの歴史の話に次いで、著名人の紹介が続いた。MAL さんは、「POL 国で最も有名なのはショパンだ」と言う。ショパンの生い立ちの説明の後、39 才で死んだショパンはフランスで埋葬されたが、心臓だけは姉が POL 国へ持ち帰り、聖十字架教会に埋められているとのこと。POL 国では、その人の最も大切な部分だけを取り出して、別の場所に埋めることがしばしばあるようである。さらに天文学者のコペルニクス、ノーベル賞を２度受賞したキュリー夫人、映画のアンジェイ・ワイダ監督（灰とダイヤモンド、地下水道など）、ヨハネ・パウロ二世、ワレサ、ロビン・シュタイン、ルス・ハンドラー、バタフスキー…と、その人の生涯を興味深く語った。また、POL 国の資源としての天然ガス、塩、硫黄、金、などの埋蔵量と現在の発掘量などについても説明。私たちが車窓から見る景色は何十分経っても写真のような同じ景色が続く。広大な畑と時々現れる林、点在する家屋…、限りなく続く真っ直ぐの道路、そして、感心するのは粗末な家屋を目にしないこと。平均的に立派な住宅である。

12:00 ワインツチェ地方にあるお城のレストラン・ツァムコ

ワに到着。12:10 からここで私達はロールキャベツをメインにした昼食をいただいた。約１時間で食べ終わり、13:15 広い敷地内の公園などを見学。赤・青・黄などの美しい花が咲いている。13:30 出発し、ZAM へ向かう。車窓からの景色は先ほどと同じで、本当に長閑である。どこまでも続く畑、時々出てくる林、しかし山というものがこの国にはない。一面、平面なのである。日本と比べ面積は 80%であるが、日本の山などの多い地形と違い、有効に土地利用できるのは POL 国の方が３倍、４倍くらい広いように思う。15:07 ドライブインでトイレ休憩。POL 国ではどのドライブインも日本のように車が溢れているということはない。トイレもガラガラだ。15:25 出発。ZAM まで後 45km くらいのようだ。

MAL さんが、「もう少しで ZAM に着くので、少し ZAM のことについて説明する」と言う。ZAM は POL の貴族ヤン・ザモイスキーが若い頃に感銘を受けたイタリアの町並みを自国にも造りたいと、イタリアの建築家ベルナルド・モランドを呼び寄せて造った。ほぼ五角形の堡塁で囲み、外敵からの侵攻を防いだようで、形状は日本の五稜郭に似ている(写真)。

ZAM は最近まで県庁所在地で、人口は約 65,000 人。周辺は農業が盛んで、そば、たばこ、ホップが特に多い。また、そばは日本のように加工せず、実を茹でてそのまま食べる。主食のじゃがいもの代用品的なもので、発酵したキュウリとはとても合い、美味しいらしい。さらに、POL 国にはサトウキビはなく、砂糖はテンサイ（砂糖大根）から作るようで、ロシア・リトアニアに近い北部地域で栽培されているらしい。

車窓の景色が少し今までと違うなと思っていると、MAL さんが、「皆さん、この辺りは非常にヤドリ木の多い所だ。このヤドリ木をクリスマスの日、若夫婦が部屋へ持ち帰って、その下でキスをすると永く幸せになれるという伝説がある」と説明。本当に道路脇の木という木にヤドリ木である。

15：55　ZAM の旧市街へ入る。小さい街であるので私たちはまず、ホテル・オルビスに入る。それぞれが荷物を各自の部屋に置いて、16：30　ロビーへ集合。

この ZAM は、1992 年に旧市街地全体がユネスコの世界遺産として登録された。私達は MAL さんの案内でザモイスキー家の宮殿 → 大聖堂 → 堡塁 → 旧市庁舎前広場の順に足を運んだ。KRK の聖マリア教会ほどの大きさではないが、立派なつくりの落ち着いた大聖堂である。ここにも第２次大戦

当時の悲しい出来事が壁面にレリーフとして残されている。修理中の旧市役所前の広場では多くの市民が談笑している。また、商業地区の建物には様々な色がつけられ、ここはアルメニア人、隣は△△人というように、色で分かるようになっている(前頁の写真)。ここは第２次大戦でも奇跡的に破壊をまぬがれたことから、後期ルネサンス建築がほぼ完全に残され、往時の姿を今に伝えている。しかし、長年の風雪による老朽化が著しく、大規模な改修工事が所々で行われている。一貴族が理想郷を造ると心血を注いだにしても、よくこれだけのものを完成させたもの。ただただザモイスキーに感謝するのみである。

18：10　私達はホテルに帰る。ホテルを出てから約１時間半経っている。「７時にはロビーへ降りてほしい。ここで夕食をとる。」と国友さんが言う。私の部屋は 101 号室だ。POL 国では日本の１階は０階、またはロビー階、２階は１階、地下１階は－１階と記されている。

私は部屋に入ってトランクを開き、靴やスリッパなどを出して洗面所へ。うがいをすると、何と洗面の水が流れない。「アレッ」と思って蛇口の後方のレバーを操作するがまったく動かない。水を出せば、その分が流れず、その内に溢れてしまうため、これ以上は水を使えない。おまけに部屋のライトが点かず、電球も切れている。これは困ったことだと、フロントへ電話するが十分に言葉が通じない。仕方なく国友さんの部屋へ電話するが不在。きっと夕食の打ち合わせだろう。私はロビーへ行き、フロントで説明するとやっと分かったのか「担当者を部屋へ行かせるので、待っていてほしい」と言う。５分程すると担当者が道具箱を下げて修理にやって来た。電球の取替えはすぐに出来たが、洗面の修理は不可能だと判断したのか電話でフロントと話をしている。私は「部屋をチェンジしなければダメなのではないか」と言うと、「暫く待ってほしい」と言って部屋を出て行った。待っている間に国友さんにも連絡がつき、事情を説明すると、早速フロントへ連絡してくれた。２～３分で国友さんから、「ホテル側も申し訳ない。部屋を変わってもらえるかと言っている」と連絡が入り、私はＯＫし、123 号室へ移ることに。国友さんがキーをもらってくれ、トランクから出した物をまた全て納めて移動。もう 19：00 になっている。国友さんにはロビーへ先に降りてもらい、私も急いで荷物だけを置いてレストランへ。

今日の夕食は鱈（タラ）のフライがメイン。みんなでワイワイと今日のことを話しながら、食事を進めるが、帰国便のことが話題に。国友さんの説明では、大阪は勿論、こちらの旅行会社とも連絡を取っているが、空港は今も完全に閉鎖され、搭乗できない客でごった返しているとのこと。これまではヨーロッパ南部のイタリア方面は運行されていたが、これもストップし、私達は POL 国の WAW → ドイツの FRA への空路による移動も出来ないとのこと。これが 20 日、21 日になって解除されるかどうかは現時点では分からない。もし、私達が 21 日に搭乗予定のＬＨ 740 便が飛ばなければ、数日先の便になるのか、１週間、10 日先になるのかは分からないという。さらにその前に、WAW → FRA への移動をどうするかもある。従って、どんな帰国方法があるのか、そのためにはどれほどの費用が

必要となるのかなどを調べて相談するということになった。

20：40　食事を終えて部屋へ。この部屋は最初の 101 号室よりも少し広いが、１階の最も奥にあるため、エレベーターまでは非常に遠い。しかし、今日は長いバスの旅で疲れたこともあり、早目に休もうと思い、同僚議員に誘われたがホテルのバーへは立寄らず、部屋へ帰って風呂に入り、そのまま休むことにする。このホテルは、KRK のホテルとは違って設備などもそんなに十分ではない。湯沸し器などはないため、トランクに入れてきたものを出して湯を沸かす。KRK で３連泊したのとは違って、ZAM では一泊しかしないため、もう翌朝に向けた整備をしておかねばならない。これで、POL 国での半分以上が過ぎたことになる。

POLの教育制度を学ぶ（４月19日）

05：00 起床し、洗面。外はまだ暗い。05：20（日本は 12：20）事務所へ電話すると、皆さんが心配しているようである。Ｔ氏は「本当に予定どおり帰国できるのか」とわざわざ問合せてくれているとのこと。当面、帰国予定後の 24、25、26 の３日間に計画されている行事などには「やむを得ず欠席になるかもしれない」ということを連絡するように指示。さらに、４月中に報告しなければならない 2009 年度の政務調査費の件は、できるだけ作業を進め、提出可能な状況にしておくよう連絡。

この日は 07：15 モーニングコール、08：00　部屋の外へバッゲージダウン、08：55　ロビー集合、09：00 出発の予定。朝食はロビー１階奥のレストランで、07：00 から自由にどうぞとなっている。私は荷物をある程度まとめ、06：00 フロントへ。散歩に１時間程出てくると告げてキーを預ける。堡塁で囲まれた旧市街地から外に出て、新市街地を見てまわろうかと思う。朝の出勤時間帯なのか、忙しそうに歩く女性や、バス停でバスの到着を待つ人を多く見かける。朝は日本よりもかなり少し冷え込んで寒い。堡塁の上部はどうなっているのかと登ってみる。堡塁はなだらかな傾斜で子どもでも簡単に登れる。高さは７～８メートルくらい、その幅は 10m以上もあり、雑草が生い茂り、タンポポも黄色い花を咲かせている。幅が４～５ｍくらいの小さな川には鳥がスイスイと泳いでいる。降りてメイン道路へ出ると、バスがよくやってくる。歩道は広いが、道路は穴ボコだらけ。日本だったら、自転車やバイクが転倒するからすぐ補修‥‥だろうが、相当以前からの傷みに見える。

ZAM 市の人口から考えると、こんなに大きな陸上競技場が必要なのかと思うほど立派なグランドがある。その反対側にはフットボール場が建設中である。つい最近までここが県庁所在地だったので、こういう施設があるのだろう。またこのあたりでは、KRK のような弔旗は余り見られない。30 分程して来た道をＵターンし、旧市街地へ戻る。昨日の案内された道と別の方を通ると、歴史的な建物の大規模改修が目につく。

07：30 ホテルへ帰り荷物をまとめ、トランクを部屋の外へ出す。07：45～08：10 朝食を

とる。部屋へ戻って５分程するとドアがノックされ、府庁から届いた FAX を封筒に入れてもってくる。Ａ４用紙が約 40 枚もあり、このホテルではこんな大量の FAX は初めてだという。中を見ると、大阪維新の会や児童虐待の事件などを大きく伝えている。08：50 にフロントへ行き、チェックアウト。08：57 に出発。ルブリン（以下、LUB）までは１時間 20 分～30 分くらいの予定という。私達が訪問する LUB での調査テーマは「現在の教育課程と課題について」であることから、車中で MAL さんが POL 国全体の教育環境(原稿の休日制度)について少し説明してくれた。

POL 国の義務教育は、６月 20 日過ぎの金曜日から８月末日までの約 65～70 日間が夏休み、11 月１日は日本で言う盆休みにあたり数日の休み、次に 12 月 22 日～新年の１月２日がクリスマスと正月休み、冬休みは１月後半から２月前半にかけて地域毎に決める。例えばＡ市では１月 20 日から２週間、Ｂ市は２月１日から２週間というように、それぞれの地域が弾力的に運用していいそうである。次に復活祭、また５月は日本と同様にゴールデンウィークとなり、１日はメーデー、３日は憲法記念日などがあるので、連続して休みとなる。一方で、大学生の夏休みは５月末のテストが OK なら９月末までの４ヶ月間が休みとなる。しかし、POL 国では大学の入試がない分を在学中に必死になって勉強しなければ卒業できないため、どの学生も夏休み期間中は個人個人が課題を設定して勉強しているとのこと。MAL さんは「日本では大学に入るために猛勉強するが、入学してしまうと後はバイトに精を出して大学へは来ないとか、大学へ来ていても授業中に居眠りするという学生が多い。POL 国でそんな現場を見つかったら、直ちに先生から教室を追い出される」と説明。

そんな説明を聞いていると、「皆さん、車の左側をご覧ください。大きな黒っぽいモニュメントが見えてくる。それが一昨日の AUS と同じようなマイダネク強制収容所だ。規模はこちらのほうがずっと大きい」と MAL さんが指を指す。私は急いでシャッターを押す。モニュメントのかなり向こうに霊廟が小さく見える。私達は先日来から、ある程度強制収容所についての知識を入れていたので、「エッ、これが？」と思う。AUS の方は特に有名であるが、歴史的にはこちらのほうが古く、規模などもずっと大きかった。１日に 1,000 人もの遺体を焼いた焼却炉は今も完全な形で残されているし、横にある霊廟の中にはここで焼却された人々の灰が積まれているようだ。270Ha もの敷地に点々と当時のままのバラック（収容棟）が目に入る。このような場所が今なお残され、多くの人々がここを訪れ、人間の負の遺産に触れる。人としての尊厳を奪われ、

ガス室へ送られ、そして焼却‥‥。何と思いテーマを私達に負わせ続けるのだろうか。

10：20 雨が降り出した。周囲が少し暗くなり、私たちが走る国道 17 号では対向車の内の何台かがライトを点けている。まもなく、LUB に到着である。

人口が約35万人のLUB市文部教育省に到着した私たちは早速、2階の会議室に案内された。

10：30 調査団を代表して冨田議員が「お忙しい中をわざわざ時間をとっていただいて感謝している。また、今回の不幸な出来事に対して心からお悔やみ申し上げる。追悼行事などで大変だろうが、これを乗越えられ、貴国と貴市が発展されるよう祈る」と挨拶。

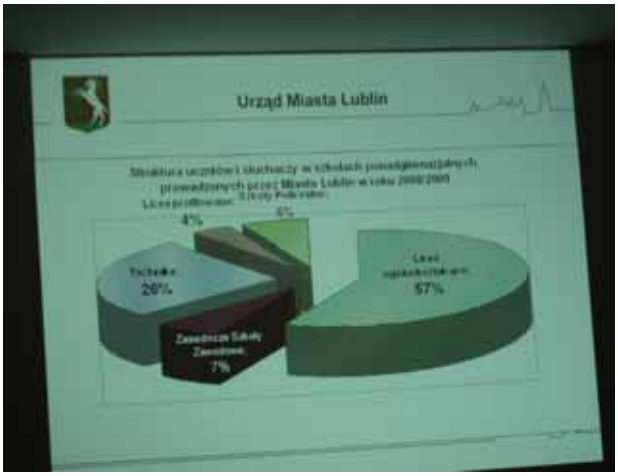
・応接者　　ピョートル・ブレク 文部教育副部長　他１人
・テーマ　　LUB 市の現在の教育と課題

ピョートル・ブレク 文部教育副部長は歓迎挨拶の中で、「当初は部長が皆様方に挨拶・説明する予定であったが、WAW での追悼行事で体調を害し、出席できなくなった。大変申し訳なく思う。今日は私が変わって説明する」と述べられた。

同氏はまず、全ヨーロッパにおける各都市の「文化教育活動のプログラム」を評価する制度があり、LUB 市は 2016 年の選考で選ばれるように努力している。ここで選ばれることはヨーロッパ全体から「文化・教育分野の先進都市」として認定されるからだと説明。

同氏は、

・POL 国では６～19 歳までを義務教育期間としている。６歳になるまでは幼稚園などに通わなければならないという決まりはないが、６歳になると、幼稚園もしくは小学校の「ゼロ」というクラスに入る。
・親は子どもを６歳で入学させるか７歳で入学させるかを選択することができる。
・KRK でも説明があったとおり、全て９月１日から新学期となり、卒業試験は小学校・中学校・高校全てで行われている。



・中学・高校は各自が自由に学校を選択できるが、全て直前の卒業試験の成績によって希望校に入学が○か×となるかが決まる。
・希望校に入学できない場合は教区内（日本の校区）の学校に進む
・義務教育は誰でも卒業できるが、常に成績で評価されるので、成績が低位の生徒はリッツェルンといわれる学校（上層中等課程学校）へ進む。ここを卒業するといろいろな資格はとれるが、就職はかなり困難なようだ。さらに専門学校に似た学校もあり、ここでは２～３年間学び、卒業後は建設現場などで働く者が多い。
・希望校は３校まで選べるが、全てコンピューターによって順が決められる。希望校へ

の入学が不可能なときは自ら進路を探すことになる。

・一般的な学校とともに支援学校・音楽学校の設置、さらに遠方からの生徒のために寮も４ヶ所開設し、児童虐待などへの対策としての児童養護施設もある

などの説明が続いた。議員団からはあらかじめテーマをお伝えしていたので、資料を作成して丁寧に説明していただいた。

さらに議員団からは、

① 学校選択のあり方

② 私立学校との関わりと財政援助はどうなっているか

③ 虐待や養育放棄の状況

④ 少人数学級と小中一貫、中高一貫などの効果

⑤ 他の地域との比較

⑥ 2012 年からの教育制度改革への取り組みと市民からの声

などについて活発な質問が出され、意見交換が行われた。

私達は、相当な競争教育が実施されていること、2012 年からの新たな教育制度改革に対して保護者はかなり戸惑いや反発があることなどを知った。長い間の社会主義体制による教育が、いま少しずつ改革されているようであるが、国民性にあったいい制度となるよう期待している。しかし、これからの改革はこれまでと違い、グローバル社会の中にあって、例えば、いまゆっくりと始まっている市場経済化が国民生活にどのような影響があるのか、娯楽環境などが一変した時、日本の子ども達のゲーム機などはどのような広がりを見せるのかなど、大いに注目しなければならない。

正午に同氏らと記念撮影して終了。ここを退出した私達はバスに乗車。15 分ほどで LUB 市の旧市街地に入りバスを降りる。街を少し散策しながら 12：36 にレストラン・バルバラリブチェックへ。今日の食事のメインはビーフカツ。

約１時間でここを後にし、また歩きながらバスへ。少し小高いところに白亜のルブリン城が見える。13：47 バスに乗車し、次の訪問地の WAW へ向かう。ここからは相当に距離があり、約３時間余りかかるとのこと。車窓からの景色はこれまでとほとんど変わらないが、ただ墓地がやたらと目に入る。しかし、どの墓地も色とりどりの美しい花が供えられ、地域の人達が頻繁にお参りされているのだなと思わせる。限りなく真っ直ぐの道を進み、15：00 ドライ

ブインでトイレ休憩。客の姿は私達以外にない。ここはレストラン・ガソリンスタンド・コンビニ・ホテルを兼ねたところである。駐車場の横・ホテル側の前には大きな池と庭が設けられ、亀がのんびりと甲羅干しをしている。飲料水はそんなに高くはないが、ガソリンは日本よりも高い。

15：15 出発。10 分足らずで車が少しノロノロと走るようになってきた。WAW に近づくとしょっちゅう渋滞になるらしい。16：50 市街地中心部に入る。今日と明日の２日間滞在するホテル・ヤンⅢ世ソビエツキーには 17：07 に到着。部屋割りなどを終え、それぞれの部屋のキーを預かる。私の部屋は 125 号室である。今日の夕食は久しぶりに日本料理になっている。ホテルのすぐ近くに評判のいい日本料理店があるようで、ロビーに 18：50 集合を確認して、暫くの間フリータイムに。

また、この時、国友さんが、「明日の下院議会と WAW 市のレクチャーは多分予定どおりだが、帰国日の飛行機の運航がどうなるかによって、それ以後の日程を大きく変更しなければならないので、引続いて大使館や空港などと連絡を取合って対応策を何種類かお示ししたい」と言う。私は、「食事の時に、各議員にある程度細かく説明し、皆さんの希望も聞いてみよう。うまく帰国できればいいわけだから、可能性を追求しよう。不可能な場合は無理をしないように」と伝える。

私たちの宿泊するホテルは WAW 中央駅のすぐ近くで、WAW 蜂起記念博物館や、ソ連が寄贈した文化科学宮殿(写真)、科学アカデミー、WAW 大学、国立オペラ劇場、旧王宮や無名戦士の墓など多数の著名な施設などがある。MAL さんは「今度は視察ではなく旅行でお越しになり、ビャウォヴィエジャ国立公園（森林地帯）、バルト海沿岸のグダンスク、トルン、ポズナン、最南部のザコパネ等も足を運ばれたらいい。私たちの国をきっと気に入ってもらえると思う」と語る。多くの悲劇に見舞われた国ではあるが、私自身、本当にいい国だと思う。

私は部屋に入り、温かい緑茶をつくり一服。着替えをして風呂に入ろうかと思うが、G階にサウナやジャグジーバスがあると案内に示されているので、「よし、後でゆっくりとサウナに入ろう」と考え、風呂には入らないことに。国友さんの話などを総合し、帰国できないことも十分に考えられるので、カッターをクリーニングに出しておこうと、フロントに伝える。明日の夕方までには出来上がるようである。

18：45 にロビーへ行くと、もう３人の議員が来ている。程なく全員が集まり、徒歩で日本食レストランへ向かうと、丁度この時間帯が仕事を終えて帰宅する人たちの時間と重なり、沢山の人がいる。黄色と赤の派手なツートンカラーの路面電車やバスも数多く行き来してい

る。

レストラン「稲波=INABA」の入口付近には先日の事故で亡くなった人達の追悼のため、写真・花・灯りなどが置かれている。私はここでも、心からの冥福をお祈りした。稲波では、誰もが「久しぶりやなー、この刺身も山葵も日本で食べるのと全然変わらんな」などと、久々の日本食を楽しむ。私は冷たいビールよりも日本酒の方が好きなので、熱燗をいただいた。銘柄は何と「松竹梅」、おいしい。隣に座っている松田議員も結構日本酒が好きなので、お互いに「マー、どうぞ」。

ここで、国友さんから、帰国への方策について説明があり、全員が「少々の費用がかかっても仕方がない。出来るだけ予定どおりに帰国できるよう、何がベストかを考えよう。ベストを尽くしてダメなら諦める。どうすれば良いかの案は、冨田・中村両議員で出してほしい」ということに。

20：50 終了し、徒歩でホテルへ。「すごく長いバスの旅で疲れたなー」とみんなが話しながらホテル着。私は早速、部屋へ入り荷物の片付け。すぐにロビー階に降り、フロントで「サウナはどこにあるのか？」と聞いてサウナ室へ向かう。少し長い廊下を歩いていくと、ブティックが２店あるが、客は全くいない。スポーツジムでは何人かが体を動かしている。サウナの受付には誰もいないので、ベルを「チン！ チン！」と鳴らすと、奥からトレーナー姿の若い男性が出てきて、ロッカーキーとともに、紙のスリッパ、タオル、バスタオルを貸してくれた。

サウナに入ると、91℃の表示が出ているが、中はそんなに広くない。ここはスポーツジムに付随したサウナであるため、数人しか同時に利用できない。徳丸議員もやってきた。暫くすると、若い女性が私たちよりも早くからサウナに入っていた男性を呼びに来た。「こんな男性用のサウナに女性がよく来るな」と思うが、後で聞くと、そんなことはヨーロッパではよくあることで、温泉なども水着を着けて男女一緒というところが多いという。私は夜サウナに入ろうと思っていたので、余りお酒を飲まなかったが、結構汗は出た。サウナは 22 時までとなっているので、ジャグジーバスも利用し、45 分ほどで部屋へ帰る。もう 22 時に近い。

議会制度と福祉を学ぶ（4月20日午前）

今日の予定は 06:45 モーニングコール、08:25 ロビーに集合し、POL 国下院(セイム)を訪問することになっている。私は昨夜、11 時過ぎに寝たが一度も夜中に目覚めることなく、朝６時まで熟睡した。前夜にサウナで汗を流した効果もあったのだろうと思うが、体が少し軽く

なった。07:30 にロビー階へ降り、奥のレストランでいつもどおりの朝食をとり、部屋へ戻ると 08:05 になっている。今日のセイムへの入場に必要なパスポートを確認し、ロビーへ。

国友さんが、「午後、FRA から KIX へ１週間ぶりに飛行機が飛びそうです」と伝えてくれる。しかし、WAW から FRA へは止まったままのようで、もう少し正確な情報を得たいとのこと。

08:25 全員が揃ったので、バスでセイムへ向かう。08:53 セイムに到着すると、小学生達が先生に引率されて大勢で国会見学に来ていた。私達は当初、セイムの議員団との懇談を予定していたが、突然の飛行機事故によって多数の議員らが死亡し、今日が国葬となっているため、どうしても意見交換は実現できなくなってしまった。そのため、国会事務局のミロスワブ・ヤロスシニスキー氏が対応してくれた。

調査団を代表して冨田議員が、「今回の不幸な出来事に対し、心からのお悔やみを申し上げる。本日は国葬で大変お忙しい中を、こうして我々の訪問をお受けいただいて感謝している。貴国はこれまでから何度も苦難に耐え、力強く立ち上がってこられた。今回もこれを乗り越えられ、貴国が大きく発展されるようお祈りする」と挨拶し、大阪から持参した「おみやげ」の浮世絵風呂敷を手渡した。

これに対し、事務局のヤロスシニスキー氏は、「日本の大阪から、議員の皆さんがお越しになったのを心から歓迎する。しかし、今日は国葬が行われることになっており、上下両院議員はもとより、多くの関係者がこのために対応することが出来ない。あまり時間をとることが出来ず、申し訳ないが、ご了解いただきたい」と述べ、私達を下院本会議場へ案内し、下院の概要を説明された。正面に POL 国の国章と国旗、弔旗が掲げられ、死亡した議員の議席には遺影とともに花束が置かれ、議場内は深い悲しみに覆われている(２頁の写真)。また、正面の議長席に向かって右側の座席にも多くの遺影と花束が見られる。これは大統領の着席する場所で、その後ろ３席は、国立銀行長(日本の日銀総裁に当たる)、官房長官、国会歴史・議事録作成責任議員らの座席だという。向かって左側が閣僚の座席で、比較的、日本の議場とよく似た感じである。

私達が感心したのは、演台前に設置されている速記者席とは別に、下院議員の中から若手議員が選ばれ、議会審議の模様や議事録を「議員の目と耳」で整理し、後世に残していくというものである。当然、速記者が審議のすべてを記録し、議会がそれをまとめて議事録にするはずであるが、これまでは社会主義体制の下で、秘密主義で正しく国会の模様が伝えられなかった。つまり、不都合なことは改ざんされ、隠され、国民には正確に伝えられなかった

という苦い過去を深く反省し、この制度が始まったようである。今は民主的な国会運営が始まり、年代記のようにまとめているということである。

同氏は私達に、

・POL 国では 1493 年から 2 院制国会が始まったこと

・中世の様々な歴史の中、近代の 1919 年 2 月 10 日、123 年間の隷属の後、WAW のディエエイスカ通に POL 国の第 2 共和国の議会がスタートしたこと

・1921 年 3 月 17 日、下院が憲法を制定したこと

・上下両院の権限の関係や、第二次世界大戦による破壊によって国会の建物は外壁だけになったこと

などを説明し、全員が傍聴席の出入口付近にある広いスペース（ロビーエリア）へ移った。

ここには写真のように、多くの名前が記されている。この名前は、第二次世界大戦中、ナチスドイツによって殺害された下院議員約 300 人の名前だという。AUS での大量殺戮に衝撃を受けた私達はここでも、国会議員の大半がなぜ殺害されなければならないのか、POL 国を襲う悲劇に胸が痛んだ。1940～1943 年までの間、どこで殺害されたのかが分からず、今もなお不明の議員もいるという。

この時、国友さんの携帯電話に連絡が入り、FRA の空港が一部再開され、遠距離国際線が運航される予定で、KIX 行きの飛行機も午後に飛ぶ予定だという。ただ WAW の空港はまだ再開されておらず、今もなおパニック状態のようだ。国友さんは私に、「絶対に KIX へ到着できるという保障はまだない。途中から引き返すことも有りだが、火山灰の影響を受けない高度に変更して飛行するらしいので、まず大丈夫だと思う。そうなれば、私達の明日の午後の予定便は KIX に向けて飛ぶことはかなりの確立で高いと思う。ただ、ここから FRA へ行くのをどうするのかということが大きな問題だ。どの方法が一番よいか、もう少し検討する」と言う。

同氏の説明は続く。これまでの社会主義体制が変わり、近代の欧米先進諸国と同じ選挙制度になり、現在は「市民プラットホーム」が最大政党で、死亡したレフ・カチンスキ大統領の所属していた「法と正義」はこれに次ぐ政党である。

議員団から、「POL 国の民主化に大きな影響を及ぼした『連帯』はどのような政党に所属し、どのような活動をしているのか」との問いに、同氏は「彼らは一つの政党ではなく、市民プラットホームや法と正義、それ以外の政党などに分かれて他の議員と同様の活動をしている」

と、答えた。また、今回の事故で多数の下院議員が死亡したが、補欠選挙は行われず、直前の選挙で「次点」となっていた者が繰上げ当選し、残任期の間、下院議員となるようである。なお、上院の場合は下院と異なって、すべて補欠選挙が実施される。

ここから私達は円柱の間といわれる美しい部屋に案内された。ここでは本会議とは別に委員会が行われ、議員同士が活発な議論を交し合うとのこと。また、特別のテーマだけで議論するのもこの部屋だという(日本の特別委員会に当たる)。広さは全議員の約 1/3 が入れる程度の大きさであるが、平均して 50 人程度の議員数での利用が多いようである。

私達は下院に続いて上院にも案内していただいたが、ここにも４人の遺影が置かれていた。私は記帳台で、*Member, Osaka Prefectural Assembly , Tetsunosuke Nakamura / 20.Apr. 2010* と記帳した。

上下両院とも、議長が議会の開会を宣言する際には錫杖が使われる。議長が錫杖で床を３度打ち付けることによって開会となるのであるが、歴代議長が使用していたものが４本、廊下に展示されていた。

・１本目はトゥロンプチンスキー氏が使用したもの

・２本目はトランポスキー氏が使用したもの

・３本目は上院で長く使用されたもの

・４本目は 1989～1993 年の間に使用されたもの

ということであるが、３本目の上院で使用されてきたこの錫杖には過去の歴史を印している極めて重要なものだという。それは、議長が握るあたりに３本の金色の輪があること。上が 1791/5/3 の憲法制定、真ん中が 1918/11/11 の独立、下が 1989/6/4 の初の民主的な選挙実施による議会を記念している。POL 国における社会主義体制の終焉を告げた錫杖というわけである。このように、大事な出来事が起こった時(歴史の転換点)、錫杖が取替えられるという。他国では経験したことのない厳しい試練に見舞われ続けながら、不屈の愛国心で立ち上がってきた歴史を国民の誇りとしている証左であろう。

上院は定数が 100 で、そんなに広い議場ではないだろうと思って入場すると、想像以上に狭く、府議会本会議場よりも狭かった(写真)。人民共和国と称していた時代には一院制のみで、上院はなかった。共和国になってから設けられた上院は、憲法の規定では下院

よりもその権限を下位にされてはいるが、上院議員は下院議員よりも尊敬の対象になっているとのこと。同氏の説明を聞き、今回の事故で死去された人々への追悼行事の様子や、多くの国民が心を痛めている姿を目の当たりにし、POL 国では政治家はわが国以上に国民から深く信頼され、尊敬されているように思う。

これらの同氏の説明に対し、議員団からは、

①本会議と委員会審議の比率

②ＥＵ加盟による議会の影響

③国会と地方議会との関連

④社会主義体制下の政党と現在の政党

などについての質問も出された。私達はセイムの議員との懇談ができなかったのが本当に残念だったが、これは致し方なく、10：25 同氏にお礼を言ってセイムを後にした。国葬に奔走されていた中を本当に申し訳なく、心から感謝申し上げる。

4月 20 日は、私達の POL 国での視察調査の事実上最後の日であるが、先の飛行機事故と火山の噴火による影響で、大幅な日程・内容の変更を余儀なくされている。特に下院議員との意見交換が出来なくなってしまったこと、WAW 市では担当責任者の部長が事故によって死亡されたために説明者が変更になったこと、さらに国葬に伴って市庁舎内での説明・懇談が不可能となり、会場が私達の滞在しているホテル内に移った。

10:45 ホテルに戻った私達は、WAW 市の福祉分野の専門家達からの説明を受けるわけであるが、ホテルでは既にプロジェクターなどを設置し、準備を終えてくれていた。私達のお礼の挨拶の後、WAW 市の担当者が早速、自己紹介を行った。

・応接者　WAW 市社会政策部　アンナ・ヤンユーフスカ・ヴフター氏(女性)
(子ども・家族問題担当専門家)
〃　アンナ・レペレヴィッチ・イヴァニュク氏(女性)
(社会援助問題担当専門家)

・テーマ　WAW 市の社会福祉政策の課題と EU 加盟による影響

ヴフター氏は WAW 市の人口が 170 万人、面積が 517 平方kmであるが、勤労者や学生らが集中する昼間人口は 250 万人を超えるなど、WAW 市の概要を数分述べた後、これまでは評議会(日本の議会)で行政担当責任者の市長を決めていたが、2002 年からは市長が直接選挙によって選ばれ、現在の市長は女性のハンナ・グロケルツ・ヴァルツ氏で、副市長は４人置かれていると説明。

いま WAW 市では、市民からの多様な要求や厳しい状況に置かれている人達への様々な施策を講じている。特に力点を置いているのは、

① アルコール中毒・麻薬患者が多く、これへの対策

② 身体障害者や高齢者への施策

③ 家庭内暴力対策とその予防
④ 要保育児童対策(保育所・児童養護施設など)
⑤ 増大する失業者への対策

などであり、これらへの具体的施策についてそれぞれ説明された。とりわけ、事後の対策よりも予防に重点を置いた行政を進めている。

紙面の都合で全ての課題を記載できないが、例えば、

① 一人で子育てしながら懸命に働いている女性や妊娠中の女性にとって、今日の社会経済環境は厳しく、失業率が非常に高い。仕事がなくアパートを出て行かなければならない人、ＡＶ被害にいつも悩まされている人達に対して、市は暫くの間、安心して生活が出来るようにと、シェルターのような施設を４ヶ所運営している。さらに親からの虐待や、養育放棄されている子ども達への施設として孤児院を 15 ケ所設置し、720 人を収容している。

② 失業率は全国平均で 1.2%程度であるが、WAW 市では 60,000 人以上の 2.8%にも達している。さらに WAW 圏全域の失業率は 10.5%にもなり、この市民への社会援助費(日本での生活保護に似通っている)が膨大で、財政的に大変「シンドイ」状況になってきている。そのため、失業者のための労働事務所を 22 ヶ所開設し、遠く離れている家族への電話や参考資料・雑誌の閲覧などを無料で提供し、社会復帰の促進を促している。

③ 保育園（40 ヶ所）では 3,560 人を保育しているが、子ども達が「いい遊び」を通じて成長できるよう努めている……などである。

さらに、WAW 市にはＥＵからの援助も相当あるが、この財源は失業者・貧困者・無住居者・障害者への施策、能力開発に充てているという。これによって直面する社会福祉施策の充実が可能となっている。

私達が最も注目したのは、様々な行政課題を民間の人達（財団・ＮＰＯ・教会など）に「知恵」を出してもらい、官民共同で事業を進めていることである。例えば、「高齢者がもっと気軽に外出できるような街にしたい。どういう方法があるか」と市が公募する → 各団体からの提案が示される。その一つとして、現状では、路面電車をはじめとする交通手段がハード・ソフト両面で十分ではない → 公共交通機関である路面電車の乗降をもっと楽にするため、低床形に変更する必要がある → そのため、電車自体の新型化もしくは大改造と、停留所付近の安全対策を実施するなどのように、具体的な対応策が提案される。

これらの提案に対し、専門家・市民・WAW 市などで構成する検討委員会でこれを分析し、採用案を決定する。この該当団体が信用のある団体の場合は契約を３年間とし、もしそうで

ない団体の案が採用された場合は１年契約とし、事業に必要な予算を付ける。そして、それぞれ３年先、１年先にまた新しい公募を行い、市民の望む施策を具体的に展開している。

これまでの成果としては、アル中患者の社会復帰施策、身体障害者(高齢者含む)向けの低床バスの導入などがあるという。これによって、低床バスは既に130台導入され、年間の利用者は一気に増えて280万人にもなったようである。

これらの説明に対して議員団から、

① 社会政策部の機構・組織はどうなっているのか

② WAW市とWAW圏の失業率はなぜこんなに高いのか

③ AV や児童虐待と孤児院の運営、また子ども達は養子縁組などのケースが考えられるのか

④ 公募する福祉政策のコンクールに関わることが出来る団体・組織はどんなものか

などの質問が出され、意見交換を行った。

最後に全員で記念撮影を行いWAW市からのレクチャーを終了した。もう12時半になっている。市を挙げて国葬に取組まれ、十分な時間のない中をわざわざホテルにまでお越しいただいたWAW市とお二人に心から感謝申し上げる。

帰国へ脱出大作戦 (4月20日午後～)

私達はこの後、ホテルから10分程の場所にあるレストラン・ホノラッカに向かった。レストランに着いた私達はここで国友さんから、帰国についての説明を聞く。「昨日の議員団の考えは、出来るだけ予定どおりの日程で帰国できるようにしたい。そのためにPOL国での日程変更が生じてもやむをえない。可能な交通手段を検討するということだったので、次のようにしたい」と言った。

① WAWからFRAへの航空便は今日も飛んでいないし、明日の朝もほとんど見込みはない

② そのため、16:35 発の WAW → ベルリン(以下、BER)行きの国際列車(インターシティ)に乗車する

② BERからはチャーターバスでFRAへ深夜に移動する

③ 早朝にFRAへ到着するので、ここでKIX行きのＬＨ 740便を待つ

というものである。彼女はさらに、「本来、全て鉄道便の方が楽だし安価であるが、BER での乗り継ぎ時間が僅か 10 分ほどしかないのが問題だ。国際列車は日本の列車と違い、10 分や 20 分の遅れは普通で、30 分以上遅れることはざらなので、そうなると、BER 駅で乗り継ぎができず、次の列車まで深夜に数時間も待たなければならず、お勧めできない。ただ、陸路をバスで移動となると、チャーターバスの費用だけで別途に数十万円必要となるがそれで良いか？」と問いかけた。私達は、「費用については仕方がない。いま考えられる最善の方法がそれであれば、その考え方でいこう」と全員が賛成。

そうなると、今夕の在ポーランド日本大使との懇談は中止せざるを得ないことになり、早速、その事情を連絡。BER でのチャーターバスは一応予約してあるとのことで、方向が固まった。

さらに、彼女は「ここでの昼食を終えるのが 13:45～14:00 だから、16 時半の列車までは少し時間がある。ポーランド大使との懇談は物理的に無理だが、折角 WAW へ来たのだから、出来れば少しの時間でも旧市街地やキュリー夫人の生家、ワルシャワ蜂起記念碑(前頁の写真)などを見学していただきたい」と言う。私達の予定はその後、ホテルへ帰り、４時までにチェックアウトし、徒歩でワルシャワ中央駅へ行くということになった。誰もが「駆け足の１時間半だなあ」と言う。

MAL さんの説明では、第二次世界大戦の終盤、(ワルシャワ蜂起で)ドイツ軍によって 20 万人以上が犠牲になり、市街地の 80%以上は灰燼に帰してしまったが、いま WAW は当時と同様の姿で残っている。これは大戦後の復興期、WAW 市民が記録を頼りに、ひび割れ１本に至るまで忠実に当時の姿を復元したためだという。度重なる厳しい国難に耐えてきた POL 人の心意気が伝わってくる。

MAL さんの案内で旧市街地へ向かうが、写真のように葬儀に参列する人々で道路はぎっしり一杯。私達はバルバカンを通り、新市街地の方にあるキュリー夫人の生家を見学。夫人は昔ここに住んでいたが、いまは博物館になっている。私達はお土産も十分に買えないまま、３時半すぎにホテルに戻る。部屋に入ると、昨日クリーニングに出しておいたカッターシャツが置かれていた。私は急いで足を洗い、下着類など全てを取り替えて、荷物をまとめる。今日は夜を

徹して列車とバスでドイツへ移動するので下着も冬用にし、寒くないようセーターやジャンパーも用意。荷物を整理してロビーへ行くと、どの議員も「こんなに慌しいのは初めてだ。汗をかいた」と言っている。私もチェックアウトに行くが、同じように汗で背中が少しひんやりしている。

16:00 いよいよ POL 国大脱出作戦開始である。私達は全員が大きなトランクを転がしながら WAW 中央駅へ向かう。中央駅はさすがに大きい。ここは地下駅になっているのでエスカレーターで移動。ホームに着くと日本の駅とはまったく違う。写真のように点字タイルもないし、列車の停止位置を示すマークなどもない。列車はファジーな止まり方をし、先ほど１両目の列車が停止した場所に、次の列車は２両目が停車することも度々だという。国友さんが私達に、「我々の乗車する列車はこの駅が始発ではないので、少しの時間しか停車しない。このあたりに止まると思うが、列車はどこに止まるかは分からないので、まず乗車してほしい。列車が出発する際に日本のような放送やベルの合図などは一切ないので、気をつけて」と告げる。ほとんどの議員がこの種の国際列車に乗るのは初めてだと言っている。私はスペインやフランスの新幹線に乗ったことはあるが、これには勿論初めてで、

列車の横で記念撮影。インターシティの文字がはっきりと写っている。

16:35 列車は定刻に動き出した。私達は６人用のコンパートメントで、６人の大きなトランクを一つずつ入れるとぎっしり一杯。通路はすれ違う時に体をずらさなければならないほど狭い。急遽予約した座席のため、私達とは別のグループには見知らぬ人が座っているとのこと。荷物を片付け、長い列車の旅に備えていると、

国友さんが「早めに食堂車へ行かないと、食事がなくなってしまう恐れがあるので、２～３人の議員が交替で行ってほしい」と言う。先発隊が食堂車へ行って 30～40 分すると、「４～５人のグループが出ていったから半分くらい大丈夫だ」と伝えてくれたので、私も食堂車へ。

食堂車の中は、日本の昔の新幹線に設けられていたほどの広さはない。メニューも豊かではないが、何と言っても座席にいるような窮屈さはないので楽チン楽チン。早速、ビールで乾杯。野菜サラダ・ソーセージ・スパゲッティなどを食べただけなのに、何か満足感がある。食堂車のチーフが我々のことを、お金を使ってくれる上客だと思ったのか、注文もしていないのにワインやビールを「サービスだ」と言って出してくれる。本来の日程であれば、今頃は大使との懇談が終わってホテルへ向かっているころである。私達は約１時間でここを出、座席へ戻った。

暫くすると、途中の停車駅なのだろうか、列車がスピードを落とし停車した。時計は 19:25 を指しているが、日の入りまでまだもう少し時間があるようだが、駅に余り人はいない。それよりも、写真のように一体どこまでが駅なのか分からない。誰でもが駅構内へ入れるし、出て行くことも出来る。ホームにいる人がすぐ近くに停まっている乗用車に乗って出て行く。その写真をとろうとデッキへ行ってシャッターを押すと、数秒後にドアが合図もなしに閉まった。うっかり車外へ出ていれば大変なことになっていた。

19:40 POL 国で見る最後の夕日が美しい。座席へ戻った私達は深夜の異動のことを考えて、誰もが少し一寝入り。私も目を閉じているといつの間にかウトウト。窓の外の景色は日本のように人家が建ち並んでいないのか、明かりはほとんどない。周囲も真っ暗で、何回か駅に停車していくが、乗降客はほとんどないように思う。

時計を見ると、もう終着の BER に到着するはずなのに、やっぱり遅延しているようだ。国友さんの指摘どおりにして良かった。BER → FRA を列車にしていれば、数時間ここで列車待ちをしなければならないところだった。10 分以上遅れて 22:33 BER 着である。WAW 中央駅とは桁違いに人が多いし、規模もすごい。BER 駅では大柄な女性と細身の男性が私達を迎えてくれた。この人達はこの後、FRA へ向かうチャーターバスの運転手である。

二人に先導されて BER 駅を出た私達は早速、迎えのバスに乗り 22:45 出発。大きなバスなので、一人で３～４席を占領できる。ＥＵ加盟国は、500km を超える長距離バスの場合は、ドライバーを必ず二人用意することと、２時間程度走行すれば最低 30 分の休憩を取らなければならないと定められているとのこと。バスに乗車した当初はワイワイと言っていた議員もいつのまにやら静かにスースー。私自身も眠ろうとは思うが、中々眠れない。

Flights are back ; ・・（4月21～22日）

アウトバーンを元気よく走っていたバスが少しスピードを落としたなと思うと、ドライブインに入った。もう日付が変わり 01:30 になっている。２時間半以上も女性の運転手が頑張ってくれたようである。みんながトイレへ行こうとするが、国友さんが「トイレへ行くには 0.5€ 要りますよ」と言う。硬貨を入れないとバーが動かず、トイレに入れない。ドイツはユーロ圏であるのに、誰も「ユーロ＝€」通貨を持っていない。日本を出る時には不要と思って用意してないし、BER では列車からバスに乗り換えただけで、誰もが POL 国のズロチしか持っていない。カードでも入れない。国友さんがみんなに「はい、１€」と言って、みんなに小銭を出してくれた。そして、「みなさん、お釣りと一緒に必ず領収証のような薄いチケットが出てきますから、必ず受け取ってくださいよ」と言う。トイレの利用だけなら 0.5€ 取られるが、トイレ利用の後、売店で飲料水などを購入する際に先程の 0.5€ を内金として使えるようだ。よく考えた制度で、そんなに飲みたいと思っていなくても、0.5€がもったいないからやはり何か飲もうになる。ちなみに、このドライブインの飲み物は写真のように少し高いように思う。コーヒーを飲みたかったが、睡眠の妨げになると思って私はジュースを飲んだ。客がほとんどいない中で、30 分の休憩は結構ゆっくりする。全員が２時前にバスに戻り、また深夜の走行になった。

バスの中は少しひんやりしているなと思っていると、誰かが「少しだけ暖房を入れてほし

い。足下が寒い」と言う。今まで余り気にならなかったが、やはり深夜の２時を過ぎると少し冷える。どの議員もトイレ休憩の際に水分補給をしたのか、水を飲む人もなく、車内は静かなもの。私達のバスは先ほどと同様にアウトバーンをひた走る。04:00 にまたドライブインへ入る。ここでは少しお腹の減った人が、トイレを済ませた後、サンドウィッチやビスケットのような物を求めているが、私は朝方に近いので、コーヒーだけを一杯いただいた。約 30 分でまたバスに戻り、いよいよラストスパートだが、誰もが静かに座っている。車窓の眺めもまったく変わらない。いま私達が走っているアウトバーンは、日本でいえば名神・東名のようなものであるが、走行している車は段違いに少ない。

06:00 計ったようにきっちり FRA マイン空港に到着である。私達はそれぞれの荷物をまたゴロゴロと転がしながら、「疲れたなあ！」と空港へ。早朝であるが、多くの人で賑わっている。空港の再開を心待ちしていた人達や１日でも早く帰国したい人達が座席確保のために早くから待っているのだろう。私達は飛行機さえ飛ぶとなれば、この日の予約があるので大丈夫だが、何日もの間待ち続けた人達は本当に気の毒だ。しかし、まだ KIX 行きが飛ぶという表示は出ていない。

国友さんが、「受付で確認したが、担当者はまだ飛ぶかどうかは分からないと言っている。しかし、昨日の KIX 行きは間違いなく先ほど大阪に着いたわけだから、大丈夫だと思う。もう少しまってください」と言う。

７時過ぎ、国友さんが、「みなさん、ＯＫです。チケットを用意してください。搭乗手続きを開始すると言っています」と連絡。私達はそれぞれ、パスポートとチケットを用意し、並んで手続き。20 分以上も並ばされたが、私達の到着が早かったこともあり、「希望の席はあるか」と聞かれる。２・４・２の配席であるから、私は「窓側」と言うと半田議員と並びの 28Ｃの席になった。重いトランクを預けると、ものすごく身軽になった気がする。私達の横ではドイツの何という TV 局かは分からないが、写真のように「空港の様子」をライブで伝えている。時計を見て、いま 07：32 だと言っている。この人達も毎日、空港の様子を伝えているのだろう。

「さあ、これで手続きが済んだから、みんなそろって食事にしてはどうか」と、レストランに入る。ここは、トレーにそれぞれの希望の品を選んで載せ、レジで生産するというセルフ方式である。ここでも、私達は「€」を持っていないので、全員の分を国友さんが精算。私

は、野菜サラダ・ポテト・ソーセージ・卵・コーヒーを選んだ。卵料理は３種類の方法がＯＫと示しているので、「*2 eggs , sunny side , pleas*」と、目玉焼きを作ってもらった。窓際に陣取って、みんなで「良かったな、いろいろあったけれど予定どおりに帰られる」と笑顔でワイワイ言ってると、何と窓際に長蛇の列が出来ている。みんな座席を求めている人のようだ。優に 100 メートルは超えているだろう。この内の何人が搭乗券を手にすることが出来るのか、少し気の毒な気がする。

朝食をとった私達は 08：20 いつもどおりの検査を受け、構内に入る。搭乗口のＢ46 近くのエリアに行き、電話をかけたり、ウトウト。

私は暫く寛いだ後、事務所に電話をしておこうと立ち上って、国際電話の辺りに行くと、どこかから、「中村議員」という声がする。「哲ちゃん」という声もある。誰が呼んでいるのかと声の主を探すと、驚いたことに、地元枚方市の桝田市議と電機連合の石橋氏である。何故こんなところで？とお互いにびっくり。両氏らは電機連合の研修会で、ヨーロッパに来ていたところ、突然空港が閉鎖され、５日間も足止めされ、ホテルを２回も変わって苦労したようである。私達は予定どおりの便で帰れるのだというと、「エーッ、ラッキーだ」と言う。毎日毎日、今日こそはと思い、そして滞在費は自分持ち、本当に大変な目に合われた。

私達は本当にラッキーだ。空港内に置かれている新聞も、*Flights are back；ash*‥‥と大きく伝えている。聞くと、私達が FRA に着いたＬＨ741 便の後の成田からの便は、FRA はもちろん、近隣の空港にも着陸できず、20 時間余りかかって成田へ引き返したという。来る時もラッキー、帰る時もラッキーで、感謝・感謝である。

また、昨日の国葬の様子も右のように大きく伝えられている。電機連合の皆さんに国葬のこと、AUS のこと、地下岩塩坑のことなど、この１週間のことをいろいろと伝える。私達は午前６時にここに来てから出発の 14:10 まで、実に８時間待ち。時間がありすぎる。

丁度10時ごろ、国友さんが「皆さん、やはりWAWからFRAへのＬH3301 便は飛んでいない。夜も寝ずにお疲れだったと思うが、陸路でここへ来て正解だった」と述べた。近くの案内にも、写真のように大半がキャンセルとなっている。近距離国際線をはじめ、すべての便が元のようになるのはもう少し時間がかかるのだろう。空港内の売店なども元気がない。こんな状況が長く続けば「世界経済が」大打撃を被ることになる。一日も早い復帰を願う。

正午少し前、私達は搭乗口に近い「食堂街」の中華レストランに入り、みんなで久しぶりに「ラーメン」を食べることに。しかし、出てきたラーメンは約1,500円も取りながら、まったくひどいものだった。細巻き寿司はそんなにひどくはなかったが、この店は一人でやっているため、並んでいる品がなくなれば終わり。みんなに少しずつしか当たらない。久しぶりに麺類を食べたというだけのことになった。

13：35 搭乗手続きを開始するとの案内が入り、私達はとうとう機内へ。８時間以上も待たされた。14：10離陸のはずが、10分遅れで出発。ベルト着用サインが消えて暫くすると、至る所で、「ああ、やっと帰れるなあ」とのつぶやきやおしゃべり。何日も待たされた人が結構いるようである。15:05 その声に合わせたように、ドリンクのサービスが始まった。飲み物が一通り行き渡った頃、今度は食事のサービスに。先程ラーメンを食べてそんなに時間が経たないのと、帰国した直後から仕事が待っていることもあり、私はアルコール類を一切避けて、りんごジュース１杯だけにし、食事は「*No, thank you*」と断った。50分余りでこれらが終わり、少し静かになると、ウツラウツラの姿が見える。私はここで、時計とカメラの時差を日本時間に戻した。一気に時間は進み、日本ではもう夜の11時だ。テレビを見ている人が多いが、私は少しでも体を休めようと、マスクをして目を閉じる。そのうちにウトウトとしたのだろうか。時計はもう深夜の１時を指し、４月22日になっている。

座席の前のモニターには飛行高度が11,500mと出ている。FRAへの往路は10,668mと出ていたから、約 1,000m近く上を飛んでいることになる。復路は通常この高さなのか、火山灰を避けてこのような高さになっているのか分からないが、何かそんなことを考えていると、あまり眠くならない。それも当然で、POL 時刻ではまだ夕方。私達の体も１週間ほどでこの国の時間に慣れてきているからだろう。

多くの乗客が立ち上がったり、トイレへ行くのが見える。私も気分転換に２時間おきにト

イレへ行くが、時計の針はゆっくりでなかなか進まない。後部へ行き、CA に今度はオレンジジュースを頼んだ。大分お腹がすいてきたが、我慢我慢と横に置いてあるおにぎりにも手を出さない。５時を回ると大半の人が起き出し、洗面用具を持って立ち上がる。

05:30 窓の外を見ると遥か彼方にオレンジ色の線のような明るさが見える(写真上)。間もなく日の出の時刻だ。大空に昇る太陽の姿は荘厳なものである。06:01 天体ショーが始まった。横の半田議員もカメラを構えている。私も５回シャッターを押した。毎日毎日繰り返される自然現象ではあるが、何度見ても神々しい。

06:45 朝食が配られる。喫茶店などでよく出される「モーニングサービス」のような感じである。夜の食事を完全に抜いているので、おなかはペコペコ。コーヒーとともに美味しくいただいた。結構水分は取っていたつもりでも、機内は相当乾燥しているのだろう。マスクをして気を付けていたつもりでもやはり足らないのか、コーヒーのお代わりをする。

07:20 食器類の片づけが始まる。いよいよ到着が近づいた。ベルト着用、テーブルを元になどの放送が流れる。07:55 私達の乗ったＬＨ740 便は静かに KIX に着陸した。入国手続きなどをするが、KIX は私たち以外の客はいないのかと思うほどに空いている。ハブ空港にはほど遠い姿だ。それぞれのトランクを取り出し、全員が揃ったところで、冨田議員から「長い旅をお疲れだった。今回の視察調査は実にいろいろなことがあったが、そのような中で多くの収穫があったと思う。この成果を府政にしっかりと反映していこう」と解散の挨拶があって、視察調査は終了。ご苦労様でした。

☆POL で気づいたこと

１ ガソリンは案外と高い

私達の POL 国内の移動は時間と経費を考え、全て専用のバスであったので、時々トイレ休憩でガソリンスタンド・レストラン兼用のような施設に立ち寄ることがあった。その際、誰もが感じていたのは「ガソリンが案外と高い」ということである。写真のように、レギュラーガソリンが約 160 円程度している。POL 国の一般的な所得と物価を考えると、日本よりもかなり高額になっている。

2 比較的立派な家屋が多い

文中にも出ているが、KRK や WAW などの大都市部だけではなく、地方の都市にも私達は訪問した。また、その道中で見える民家で、朽ちかけているようなものはなかった。これまで訪問したウズベキスタンなどの諸外国では、結構老朽化した家屋やバラックのようなのが多かった。しかし、この国では田舎の方に行っても写真のように、車窓から見える家は立派なものが多い。また桁違いに立派な家というものも見ないが、アパートのベランダに洗濯物もみかけない。所得は他のヨーロッパ諸国に比べて決して多い方ではないだろうが、これは国民性の違いだろう。豊かな文化と歴史の国としての誇りかもしれない。

3 電柱はこんなに細くて大丈夫？

私の驚いた物の一つに「電柱の細さ」がある。右の写真のように電柱が実に細いこと。そして、これがコンクリートの塊ではなく、私達が日頃よく見かける「ブロック」のように間がスコンと空いているのである。コンクリートの中には鉄筋が入っているらしいが、本当にこれで大丈夫なのかと思う。また、トランスが載ったり、3～4方面に電線が張られている所ではこの電柱を3本使用して上で括束している。日本の場合は基準がきつ過ぎるのだろうか。

4 日本もインターシティを見習おう

今回の視察で利用した国際列車のインターシティに乗車して、日本が見習わなければならないと思ったのは、乗客用の「大型の荷物」を置くスペースを用意することである。地方の短距離用の列車は別として、長距離を走行する新幹線などで、ぜひ参考にしてほしい。私も時々新幹線に乗るが、海外からの観光客は今回の私達と同じように大きなトランクを持っているのに、それを置く場所がない。デッキも小さいし、通路にも置けない。インターシティは私達の頭上に大型トランクをしっかりと収められる。トイレでも、少々のことでは壊れない丈夫な造りになっている。少し工夫すれば十部に対応できる。美観も大事だが、機能性を疎かにしてはなるまい。

5 日本にもこんなバス停を

日本では路線バスのバス停は、駅前を除いてほとんどが道路脇にバス停の標識が置かれ、

乗客はそこでバスの到着を待っている。比較的歩道が広い場合はそこにベンチが置かれていることもあるが、歩道よりもまだ後ろで、ガラス張りのこんな形のバス停が用意されているのはまず見当たらない。私は朝の散歩でこのバス停を見つけた。４～５人のサラリーマンと高齢者がここに座りながら談笑している。バスのダイヤは相当間隔が開いているのかと思うと、そうでもなかった。平均して 10 分に１本はある。

いま、公共交通機関としてのバス路線は一部で乗客がガタ減りになり、赤字が多く、撤退したいということをよく聞く。私は自動車を運転できない高齢者らのために、買い物が郊外のスーパーが中心となった今、スーパーの駐車場の一角にバスを待てるスペースを確保し、駅→団地→スーパーを回る路線をつくれば、みんなの足が確保されると、取上げているだけに、これを参考にしたい。

☆視察調査を終えて

ポーランドの国は、私たちに想像できないほどの苦難・悲劇に遭遇してきた。そのような中を不屈の精神で何度も立ち上がり、今日を迎えていることに深く敬意を表す。また、訪問中ずっとご一緒いただいた MALGORZATA（マウゴジャタ＝通称マルガレッタ）さんの歴史への認識の深さには敬服する。ガイド＝通訳とはいえ、大変な資料を持参し、私達にいろいろと説明をしていただいたことに心から感謝している。行く先々での調査に大いに役立った。

また、アウシュビッツでご説明いただいた中谷さんは、当地での唯一の日本人ガイドとして活躍されているが、その強い信念に敬服する。近くご結婚されるようであるが、「お幸せに」と、心からお祝い申し上げる。

この国に滞在したのは僅か１週間のことであったが、美しい風景と貴重な歴史的遺産、そして国を守ろうとする気概と価値観は長く記憶に残ると思う。とりわけ、アウシュビッツのあの深い悲しみは訪れた者すべてに「人とは何か、権力とは何か」を教えてくれる。人類の負の遺産として、長くこれを語り継いでいかなければならない。

訪問日程予定表(出発直前)

	月 日	都市名	交通	時間	スケジュール
1	4/15 (木)	関西空港 フランクフルト クラクフ	LH741 LH3358	10:00 15:10 16:30 18:00	ルフトハンザ航空にて、フランクフルトへ フランクフルト着 乗り継ぎ便にて、クラクフへ 着後、専用車にて、ホテルへ ＜クラクフ:ホリデイン クラクフ泊＞
2	4/16 (金)	クラクフ	専用車	09:00	120 年の歴史を誇る名門公立高校「ヤン・ソビエツキ三世」 高等学校訪問 (10:00～12:00) 新しい教育プログラム、施設、教室の視察 クラクフ市庁舎訪問 (13:30～15:30) 歴史的建造物を活かした都市観光づくり、市の景観保全と都市計画の相互関連性について調査 ＜クラクフ:ホリデイン クラクフ泊＞
3	4/17 (土)	クラクフ	専用車	08:00 13:00 17:15	クラクフ郊外のアウシュビッツ強制収容所とビルケナウ強制収容所を視察、及び人権・平和施策についてレクチャー クラフク郊外の世界最古の岩塩坑「ヴィエリチカ」を視察 世界遺産保存施策について調査 (14:30～16:30) ホテル着 ＜クラクフ:ホリデイン クラクフ泊＞
4	4/18 (日)	クラクフ ザモシチ	専用車	08:30 16:00 17:30	専用車にて世界遺産の街ザモシチ市へ移動 (6 時間) 着後、世界的に例のない、「理想都市」に近い計画と建築の集合体について調査 ホテル着 ＜ザモシチ:ザモイスキーホテル・オルビス＞
5	4/19 (月)	ザモシチ ルブリン ワルシャワ	専用車	09:00 13:00 18:00	専用車にて、視察先都市ルブリン市に移動 ルブリン市教育省を訪問 文教都市としての行政支援、保護者の教育費負担などについて調査 ホテル着 ＜ワルシャワ:ヤン 3 世ソビエスキーホテル泊＞
6	4/20 (火)	ワルシャワ	専用車	09:00 午後 17:00 19:00	ポーランド下院議会「セイム」訪問 (09:30～11:30) セイムの現在の役割と活動に関するレクチャー、質疑応答 ワルシャワ市庁舎訪問 (13:30～15:30) EU 加盟後の経済状況と国民生活変化、福祉行政の実態について 日本在ポーランド大使との懇談 ホテル着 ＜ワルシャワ:ヤン 3 世ソビエスキーホテル＞
7	4/21 (水)	ワルシャワ フランクフルト	専用車 LH3301 LH740	午前 10:00 11:45 14:10	専用車にて、空港へ ルフトハンザ航空にて、フランクフルトへ フランクフルト着 ルフトハンザ航空にて、関西空港へ ＜機中泊＞
8	4/22 (木)	関西空港		08:20	関西空港着

☆お世話になった皆さんに感謝

今回の視察調査では多くの方々にいろいろとお世話になった。一般の観光では余り訪問することのないPOL国での諸計画を練り、関係機関との調整などを進めてくれた方々や、視察補助員として１週間余り頑張ってくれた国友美紀さんに深く感謝する。彼女がいなければ、到底こんなにうまく予定どおりには帰国できなかったかもしれない。また、今回はアイスランドにおける火山の噴火に伴い、航空機の飛行が全面的に止められるなどの異例の事態が生じたが、帰国に際して専門的な立場からお力添えいただいた外務省や大使館の皆さんには殊の外お世話になった。

今回の視察でお世話になった方々がご健勝で、これからも益々ご活躍されることを、心から願っている。

この訪問記で使用した地名等の略は下記のとおり

ポーランド共和国＝POL国	クラクフ＝KRK	ザモシチ＝ZAM
ワルシャワ＝WAW	ルブリン＝LUB	アウシュビッツ＝ AUS
ビルケナウ＝BIR	ヴィエリチ＝WIE	フランクフルト＝FRA
ベルリン＝BER	関空＝KIX	

◆このレポートについてのお尋ねは、下記へどうぞ。

・大阪府議会議員　中村哲之助事務所　Tel　072-844-8888　Fax 072-844-4444

・民主党無所属ネット議員団控室　Tel　06-6941-0219　Fax 06-6941-8411